

「持続可能な多世代共創社会のデザイン」 研究開発領域 中間評価のための調査分析

(『「持続可能な多世代共創社会のデザイン」研究開発領域の中間評価に向けた
情報収集・分析支援業務」報告書)

2017 年 2 月



RISTEX における研究開発領域の評価は、プロジェクトをはじめとする領域の関与者からの情報等を基に領域マネジメントグループが自己評価を行い、それらを踏まえ、RISTEX の運営評価委員会が外部評価を行うこととしています。

この評価の一環として、領域全体の進捗や運営状況を把握するために、「公益財団法人 未来工学研究所」に委託してプロジェクト関係者等にアンケート調査を試行しました。本報告書はそのアンケート調査結果をまとめたものです。

目次

1. 調査分析の枠組み	3
1.1. プログラム評価（中間評価）の一般的な枠組み.....	3
1.2. RISTEX プログラムに共通する論理構造	3
1.2.1. RISTEX の置かれた状況	3
1.2.2. RISTEX プログラムのロジックモデル.....	4
1.2.3. 評価項目とロジックモデルとの関係.....	5
1.3. 調査分析の概要.....	6
1.3.1. アドバイザー向けのアンケート調査.....	6
1.3.2. プロジェクト実施者・協力者向けのアンケート調査.....	6
1.3.3. アンケート結果の分析	7
2. 評価項目別の分析	9
2.1. 対象とする問題及びその解決に至る筋道（ストーリー）	9
2.1.1. 対象とする問題と目指す社会の姿	9
2.1.2. 成果の社会への影響	10
2.2. 領域の運営・活動状況（プロセス）	11
2.2.1. プロジェクトポートフォリオ.....	11
2.2.2. 選考のプロセス・方法	13
2.2.3. 問題所有者・問題解決者への働きかけ	20
2.2.4. 運営や活動状況についてのモニタリング	24
2.3. 目標達成に向けた進捗状況等.....	29
2.3.1. 仮説として設定した問題群及びフレーミングの妥当性等に関する領域としての検証及びエビデンスの形成（アウトプット）	29
2.3.2. 「多世代共創」「持続可能性」の実践コミュニティの形成.....	31
2.3.3. 実践コミュニティの形成に向けたアクターの変化（アウトカム）	34

別添資料 アンケート調査票

1. 調査分析の枠組み

1.1. プログラム評価（中間評価）の一般的な枠組み

途上段階におけるプログラム評価の目的は、意図した結果（＝アウトカム）の達成（見込み）状況やそれに向けたプロセスの有効性、効率性を検証することで、プログラム改善のための示唆を得ることにある。

有効なプログラム評価を行うためには、評価対象の論理構造をプログラム設計段階において仮説として明確化しておく必要があり、そのためのツールとして、ロジックモデルが用いられることが多い。次図はその一般的な構成を示したものである。

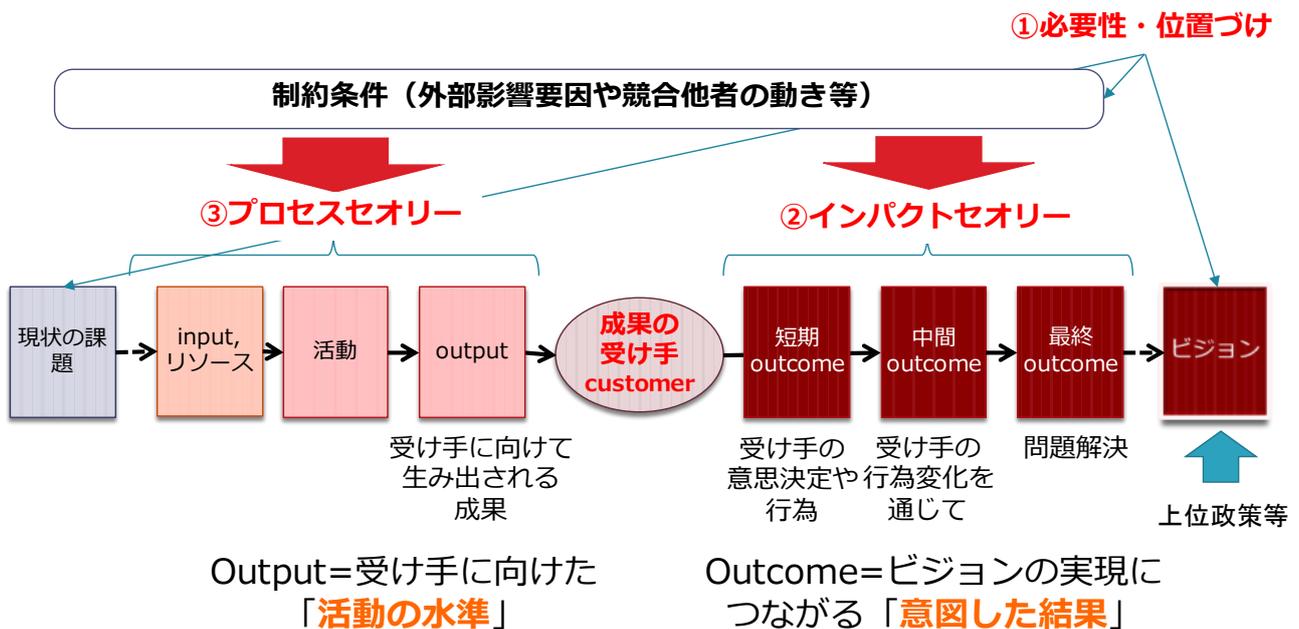


図 1 一般的なロジックモデル

（出典）林隆之氏資料等をもとに作成

一方、日本においては、政策分野や階層によらず、具体的な「アウトカム目標」やそこに至る「道筋」などの論理構造が事前の段階で明確化されていることはほとんどない。社会技術研究開発センター（RISTEX）における研究開発領域も例外ではなく、そのため、調査分析や関係者との議論を通じて、これらを再構成していくなどの発見的方法が求められている。

本調査分析を実施するにあたっては、こうした状況を前提に、まず RISTEX が置かれた状況や政策的な関連性・位置づけを整理するとともに、RISTEX のプログラムに共通する特徴を反映したロジックモデルを作成した。作成にあたっては、『運営方針』等の資料分析に加え、運営評価委員会やスタッフ参加によるワークショップでの議論を参照した。

1.2. RISTEX プログラムに共通する論理構造

1.2.1. RISTEX の置かれた状況

RISTEX 及び RISTEX におけるプログラムの置かれた状況について整理すると、次のようなものであ

る。

- 各府省は、独自のミッションに基づく政策アジェンダを持つとともに、「科学技術基本計画」や政権の意向を受けた「科学技術イノベーション総合戦略」等の上位政策から政策アジェンダを規定される。JST の一部門である RISTEX の場合、「科学技術振興」や「研究人材（研究支援人材）育成」をミッションとする文部科学省（MEXT）の政策ニーズや、科学技術基本計画などの上位政策への貢献が求められる。
- 第5期科学技術基本計画では、「第6章 科学技術イノベーションと社会との関係進化」の中で、「(1) 共創的科学技術イノベーションの推進」として「ステークホルダーによる対話・協働」「共創に向けた各ステークホルダーの取組」がとりあげられており、ステークホルダー（SH）協働のトランスディシプリナリー（TD）研究を志向する RISTEX のアプローチはこれらを先導してきた。
- 社会問題解決への寄与をミッションとする RISTEX がプログラムとして対象とすべき問題群は、その位置づけを考えると、他のミッション省庁がすでに政策アジェンダとしてとりあげているものではなく、政策アジェンダ化されていないもしくは問題解決のためにパラダイム転換の求められる潜在的に重要な問題群であるべきである。
- 一方、科学技術基本計画は省庁を横断して適用されるものであり、他の省庁も追随していくことを考えると、「先導性」の所在を再検討し、これらとの本質的な差別化を図っていくことが求められている。

1.2.2. RISTEX プログラムのロジックモデル

以上のような想定を踏まえ、RISTEX におけるプログラムの特徴を反映した次のようなロジックモデルを作成した。本報告書においては、この論理構造をもとに調査分析を実施している。なお、丸囲みの数字はプログラムとして備えるべき機能（活動）やアウトプット、アウトカムを表している。

- ①政策アジェンダ化されていないもしくはパラダイム転換の求められる潜在的に重要な問題群を仮説として特定、フレーミングした上で（プログラムレベル）、
- 「SH 協働」を基本とする問題解決志向の TD 研究プロジェクトに②委託を行い、その成果の担い手による③自律的な問題解決（狭義の「社会実装」）を促進する仕組みである（プロジェクトレベル）。これらの成果は他の文脈においても利用可能なよう、十分に一般化（モデル化）されていることが望ましい。
- 社会的問題解決のエコシステム全体をとらえると、領域設定段階からこれらの問題群に対する利害関係者や問題解決能力を持つ主体を巻き込み、実施に伴って関心層を拡大していけるよう、④ネットワークの形成・拡大・強化を促進することがカギとなる。こうしたネットワークが、知識交流を行う実践コミュニティ¹として、⑤社会的議論を喚起したり、⑥関係者への働きかけ（政策提言・ロビーイング等）を行うことで、政策アジェンダの変容や市民・企業等の自主的取組につながってい

¹ Community of Practice（実践共同体、実践コミュニティ）とは、ジーン・レイヴとエティエンヌ・ウェンガー（1993）による用語であり、参加者（参加者）が、ある集団への具体的な参加を通して知識と技巧の修得が可能になる場や、そのような参加者の社会的実践がくりひろげられる場の総称である。人びとは実践共同体において、さまざまな役割を担い行為することで、実践共同体を維持することに貢献する。その際の学習とは、知能や技能を個人が習得することではなく、実践共同体への参加を通して得られる役割の変化や過程そのものである。

（池田光穂 HP, <http://www.cscd.osaka-u.ac.jp/user/rosaldo/000728cp.html>）

く。こうしたネットワークの働きにより、新しいソーシャルビジネスや問題群に関わる学術的なムーブメントが生まれることも期待される。そのためには、仮説として設定した問題群及びフレーミングの妥当性等について、領域として⑦検証を行い、⑧エビデンスを形成する機能を持つ必要がある（プログラムレベル）。

- また、RISTEX のプログラムに関与する経験を通じて、⑨共創マインドとスキルを持った人材の層に厚みが生まれる。こうした人材の活動により、TD 研究の重要性が研究コミュニティにおいて認識され、コミュニティ自体の変容を促す（機関レベル）。
- これら一連のシステムを⑩RISTEX モデルとして構築し、問題解決型の研究開発プログラムのプロトタイプとして常に改善を行い、内外に発信、世界をリードする（機関レベル）。

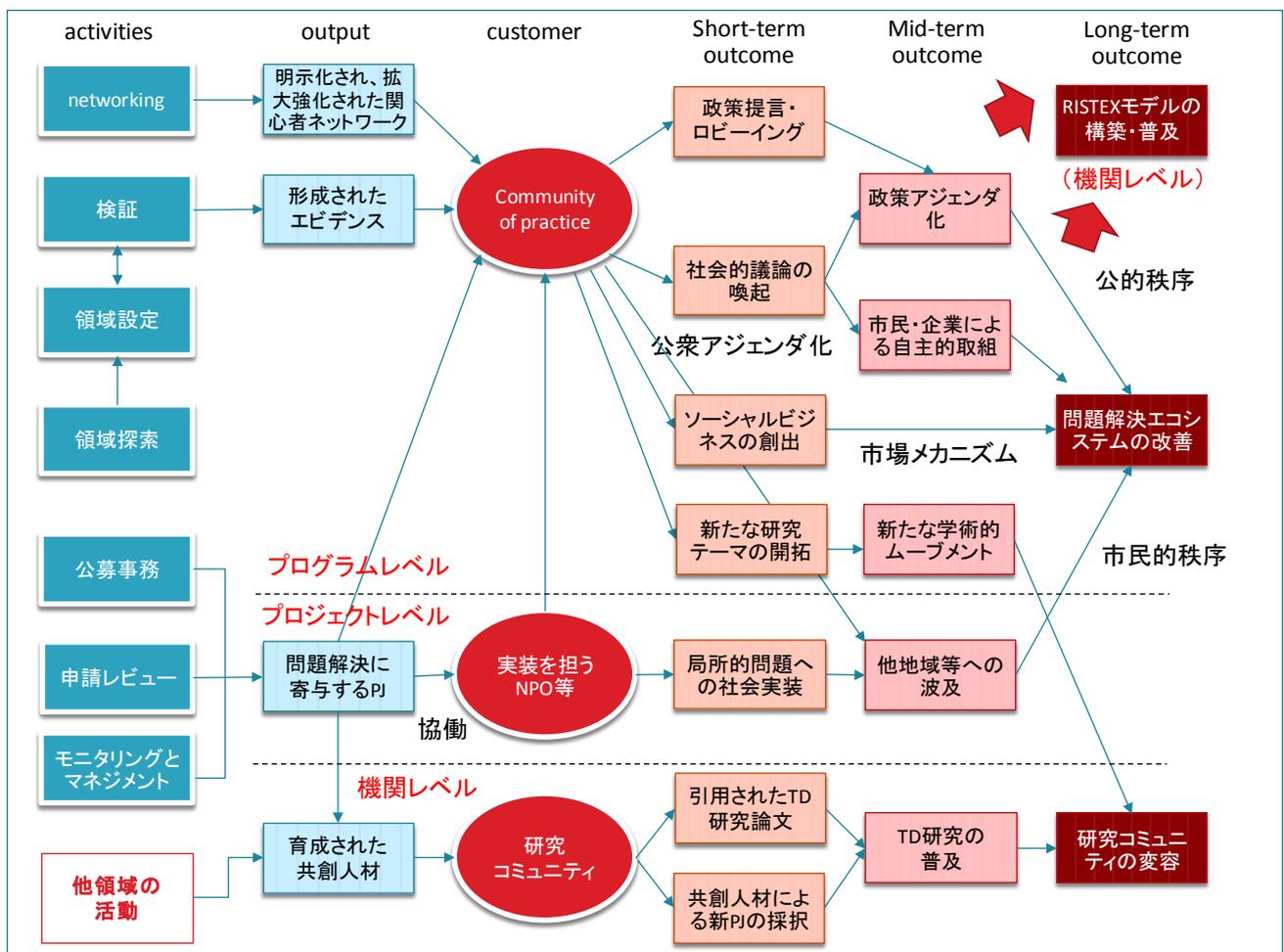


図 2 RISTEX プログラムの共通ロジックモデル

1.2.3. 評価項目とロジックモデルとの関係

中間評価項目とロジックモデルとの関係は次のようなものである。

表 1 各評価項目の概要とロジックモデルとの関係（何を評価するか）

評価項目	概要	ロジックモデルとの対応
1. 対象とする問題及びその解決に至る道筋(ストーリー)	プログラムの必要性・関連性 (Rationale) と目的 (Objective) のもつもらしさ(plausibility)を説明する	ロジックモデルそれ自体 必要性・位置づけ(上位政策との関連性や関連プログラムの中での位置づけ)と、プログラムを取り巻く外部環境・制約条件
2. 領域の運営・活動状況(プロセス)	目標達成に向けた取組内容や方法(プロセス)の妥当性を確認し、改善課題を見出す	プロセスセオリー
3. 目標達成に向けた進捗状況等(アウトカム)	実績を幅広く把握する アウトプット: ● 成果の担い手による「自律的な問題解決(狭義の「社会実装」)」を可能とするPJの採択・推進 ● 知識・技術の一般化を可能とするPJの推進 ● ネットワークの形成・拡大・強化の促進 ● 仮説として設定した問題群及びフレーミングの妥当性等に関する領域としての検証及びエビデンスの形成 ● 共創マインドとスキルを持った人材の育成、等 アウトカム: ● 実装を担うNPO等の期待感や成果展開 ● Community of Practiceの期待感や成果展開 ● 研究コミュニティの期待感や変容、等	インパクトセオリー+アウトプット

1.3. 調査分析の概要

「持続可能な多世代共創社会のデザイン」研究開発領域の中間評価のために、以下のような調査分析を実施した。

1.3.1. アドバイザー向けのアンケート調査

プログラムを取り巻く社会情勢の変化や、プログラムとしての成果、取り組み状況を把握するために、領域アドバイザー (AD) に対してアンケート調査を実施した。調査期間は2016年11月末から12月初旬にかけての約2週間である。

アンケートはAD11人に対してメールにて依頼、発送を行い、7人からの回答を得た(回収率63.6%)。

1.3.2. プロジェクト実施者・協力者向けのアンケート調査

プロジェクトレベルでの成果の進展や領域マネジメントの効果等について把握するために、プロジェクト (PJ) の実施者・協力者に対してアンケート調査を実施した。調査期間は2016年11月から12月にかけての約1ヶ月間である。

調査票は、相互に比較可能な設問を含む6種類を用意した。具体的には、平成28年度に新規採択された課題とそれ以外(平成26年度、27年度採択)に大きくわけ、それぞれについて、各PJにおける役割別に設計した。各PJにおける役割とは、次の3つである。

- 代表者及びグループリーダー (GL)
- 実装の担い手
- エンドユーザー

調査対象は、企画調査を除く各PJの代表者及びGLの全員に加え、PJに実施者もしくは協力者とし

て参画している実装の担い手及びエンドユーザーを、各PJの代表者による推薦という形で選定した。

なお、調査票には、PJの自己診断に係る項目が含まれている。これは、各PJの実施者によるリフレクションを促進することを企図したものであり、領域のマネジメント活動の一環としても位置付けられるものである。

次表は、調査票のタイプ別に、対象者数、回答者数、回収率を比較したものである。

表 2 対象者数、回答者数、回収率（調査票のタイプ別）

	①代表者・GL(2年～)	②実装の担い手(2年～)	③エンドユーザー(2年～)	④代表者・GL(新規)	⑤実装の担い手(新規)	⑥エンドユーザー(新規)	総計
対象者数	30	10	4	26	5	3	78
回答者数	26	9	4	25	5	1	70
回収率	86.7%	90.0%	100.0%	96.2%	100.0%	33.3%	89.7%

なお、回答のあった70名の属性について、採択年度別、回答者のPJにおける役割、所属機関のタイプ別にみると次の通りである。

表 3 回答者の属性

H26	①代表者	②GL	③実装の担い手	④エンドユーザー	計
①大学等	2	7	0	0	9
②公的研究機関等	1	1	1	0	3
③政府・自治体等	0	0	1	3	4
④民間企業等	0	1	0	0	1
⑤NPO等	0	0	0	0	0
総計	3	9	2	3	17
H27	①代表者	②GL	③実装の担い手	④エンドユーザー	計
①大学等	3	7	0	0	10
②公的研究機関等	1	1	0	0	2
③政府・自治体等	0	0	3	0	3
④民間企業等	0	0	2	0	2
⑤NPO等	1	1	2	1	5
総計	5	9	7	1	22
H28	①代表者	②GL	③実装の担い手	④エンドユーザー	計
①大学等	7	11	2	0	20
②公的研究機関等	0	0	0	0	0
③政府・自治体等	0	0	2	1	3
④民間企業等	0	1	0	0	1
⑤NPO等	1	5	1	0	7
総計	8	17	5	1	31

注 1) ②公的研究機関等には、独立行政法人、研究開発法人、公設試を含む。

注 2) ⑤NPO等には、NPO法人、社団法人、財団法人、任意団体を含む。

1.3.3. アンケート結果の分析

上記のアンケート結果を踏まえ、クロス集計分析等を行った。その際、自由回答欄における記述と照合するなど、可能な解釈についてとりまとめた。

2. 評価項目別の分析

以下では、評価項目別に、調査分析結果を示す。

2.1. 対象とする問題及びその解決に至る筋道（ストーリー）

本評価項目は、「1-1. 対象とする問題と目指す社会の姿」、「1-2. 問題解決に向けての具体的な目標と達成方法」、「1-3. 成果の社会への影響」から構成される。

AD 向け及び PJ 向けアンケートにおいては、「1-1. 対象とする問題と目指す社会の姿」、「1-3. 成果の社会への影響」に関連する質問項目を設けた。より詳細に状況把握を行うためには、政策文書等のレビューや、有識者、問題当事者等へのヒアリング等を行う必要がある。

以下、項目別に関連する調査分析の結果を示す。

2.1.1. 対象とする問題と目指す社会の姿

AD に対し、「領域がはじまった 3 年前（平成 26 年春頃）と比較し、領域をとりまく問題状況や社会情勢は変化しているか」についてたずねた。

回答者 7 名全員が、「大きく変化している」もしくは「少し変化している」を選択している。

自由記入欄をみると、ポピュリズムや行き過ぎたグローバリゼーションに対する反動や、少子高齢化、財政悪化が目に見える形でいよいよ深刻化してきたこともあり、「ローカリゼーション重視」、「地方創生の重視」という傾向に拍車がかかっていること、「子どもの貧困」や「格差の拡大」、「空き家問題」などが顕在化してきたことなどがあげられている。

一方、地球温暖化問題については、その影響が実感されるようになったにも関わらず、依然として行動変容にはつながっていないという問題を指摘する意見もあった。

【AD 向け】

Q1. 領域がはじまった 3 年前（平成 26 年春頃）と比較し、領域をとりまく問題状況や社会情勢は変化していると思われますか？該当するもの 1 つに○をご記入ください。

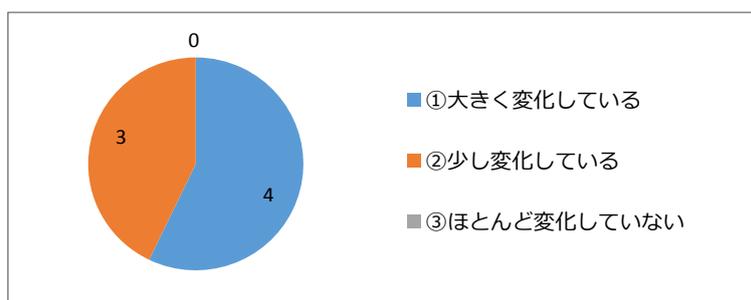


図 3 領域をとりまく問題状況や社会情勢の変化

2.1.2. 成果の社会への影響

AD に対し、「多世代共創」や「持続可能性」、「地域デザイン」といった領域のコンセプトや成果を社会に普及・展開するために、領域としてアプローチすべき対象にはどのような組織や個人がいるかたずねた。

領域としてアプローチすべき対象として、まずは「領域のコンセプトや成果を社会に普及・展開を推進する者」が必要という認識の下、「市町村レベルの自治体」や「PJ 関係者」をあげる意見が散見された。ただし、前者の場合、問題意識の高い職員は限られていること（先進的な職員は1%程度とする見解もあった）、また、組織的な動きにするには首長や上層部の理解が不可欠であること、といった課題があげられている。こうした課題を克服するためには、魅力を感じる成功例を定量的情報と成功に至ったプロセスとともに見える化が必要とする指摘もあった。後者の場合、PJ レベルでの取組にとどまらず、統合実装的な取組や相互のサイトビジットによるコミュニティ形成の促進が必要、という意見があった。

一方、「税金や補助金を全否定するわけではないが、それが大多数というのでは、「持続可能社会のデザイン」という領域のコンセプトに合わない」とし、まずは事業成立性を検討した上で、適切な主体にアプローチすべき、という意見もあった。

その他、政策系金融機関支部の所長、自治体等が具体的計画を策定する際にコミットする機会が多い関係者や組織（コンサル等）、マスコミ等、といった意見もあった。

【AD 向け】

Q2-2(1)「多世代共創」や「持続可能性」、「地域デザイン」といった領域のコンセプトや成果を社会に普及・展開するために、領域としてアプローチすべき対象にはどのような組織や個人がいますか？特に、領域として対話や連携などを模索すべき方々がいれば、その理由（領域と比較してユニークと思われる点など）とともに具体的にご記入ください。

※ ここでいう「対象」とは、領域と類似の問題意識やコンセプトを持つ活動や研究を行っている組織・個人や、領域のコンセプトや成果の普及・展開の潜在的な担い手、受け手（利用者、受益者）を含みます。

また、PJ に対しても、以下のような質問を行った。

【PJ 向け】

成果の社会実装に向けて、働きかけや情報発信を行うべき成果の受益者やエンドユーザー（政府・自治体、利害関係のある各種団体、市民等）として、どのような人々を想定していますか？具体的にご記入ください。

PJ レベルでは、より具体的な対象が記載されているが、一般化すると次のようなものである（65 人が回答）。

- 中央省庁（厚生労働省）
- 首長、地方議会、自治体
- 教育委員会、公共図書館、公共施設、社会福祉協議会、地域包括支援センター等

- 小中学校、保育園、幼稚園等の地域の教育機関
- 市民等のサポートを行う弁護士、税理士、公認会計士、司法書士など
- 地域の医療機関
- 地域の大学
- 関連分野の学協会
- 民間事業者、地域企業（漁業組合、畜産農家、林業従事者、飲食店、宅配業者、流通業者、公共施設マネジメント支援企業、介護医療従事者等）
- NPO や社会的企業（当事者団体、障害者支援団体、子育て支援団体、民間サービス提供事業者、演劇サークル、等）
- 自治会、町会、老人クラブ等の団体
- 水道事業、防災対策、施設管理、公園管理、高齢者施設に携わっている人々
- 地域住民（流域住民、子育て世代、高齢者、空き家保有者、移住者、等）

2.2. 領域の運営・活動状況（プロセス）

本評価項目では、「①目標達成に向けて妥当な活動計画が立てられているか」や「②活動中に課題点や困難を把握できているか、それらを乗り越える方策が検討されているか」、「③妥当なプロジェクトポートフォリオが考えられ、募集選考やプロジェクト・マネジメントに反映されているか」、「④領域内外のステークホルダーを巻き込む取り組みや働きかけが適切にされているか」、「⑤プロジェクト実施者をはじめ、ステークホルダーからの情報をもとに、領域運営や活動について妥当な分析がなされているか」を検証することになる。

アンケート調査自体が、活動中の課題点や困難を把握したり、ステークホルダーからの情報を収集するための手段でもあるが、ここでは、「プロジェクトポートフォリオ」、「選考のプロセス・方法」、「問題所有者・問題解決者への働きかけ」、「運営や活動状況についてのモニタリング」という 4 点から結果のとりまとめを行った。

2.2.1. プロジェクトポートフォリオ

AD 向けアンケートでは、欠けている PJ として、「福島（原子力災害から）の復興」や「被災地復興ボランティア」に係るもの、「医農福連携」、「都市農業」などをあげる意見があった。より具体的な指摘として、「こども食堂（南相馬で行われている「親子食堂」は子供から単身赴任者、お年寄りなど幅広い層が共に食事を作り、一緒に食べる機会を月 1 回設けている）」といったものもあった。

また、領域としての PJ ポートフォリオを何かを考えるためには、まず持続可能な社会とは何かを領域として定義し、その中で多世代共創の位置づけを明確にした上で、そのプラットフォームを考え、そこに各 PJ を配置する、という作業が不可欠であり、こうした作業を領域の進展にあわせて絶えず行い、ブラッシュアップしていくことで行動と諸指標の関係が明確になるのではないかという指摘があった。

一方、欠けている PJ はないが、各 PJ に共通して不足しているものや、領域としての働きかけが不十分なものを指摘する意見が多くみられた。具体的には次のようなものである。

- 技術、特にリソースの利用効率を飛躍的に高めるデジタルイノベーションの活用が弱い。
- 共に創るという概念の深化及び具体化が、まだ不足している。

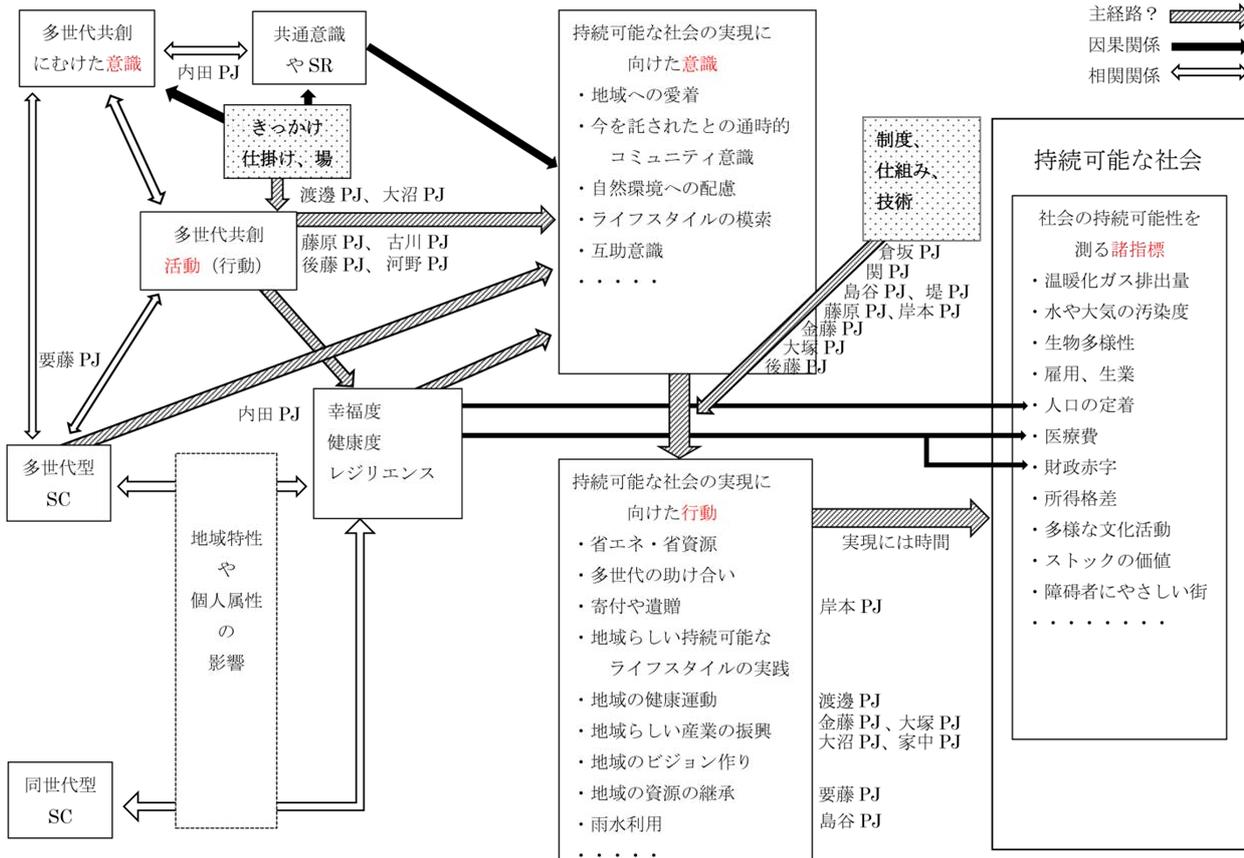
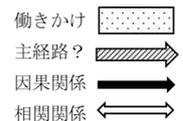
- 意識変容→行動変容という経路だけではなく、多世代の行動が直接持続可能な行動となり、そこから人々の意識変容が起こるといった経路も考えられるが、こうした経路に対する介入(PJや働きかけ)が不足しているのではないか。
- 成果移転を考えるためには、PJの内容や進行を俯瞰的に眺め、PJの計画やマネジメントにおける課題、PJが対象(事業、技術、地域他)にアクセスする過程での障害・課題、得られつつある成果の特性等を骨太に把握・評価してみる必要がある。
- 個別PJが扱っているのは局所的問題に対するアプローチであり、組み合わせの効果を考える必要がある。特に自治体(市町村)がプラットフォームとして機能する可能性を検討したい(一方、各PJにおける自治体の位置づけが弱いという側面もある)。

【AD向け】

領域としての問題意識や目指す社会の姿、コンセプトの深化に向けて、現在採択されているプロジェクトの構成(ポートフォリオ)では満たすことのできない、もしくは欠けている視点はありますか？次図(合宿での議論を基に総括が作成)を参考に、具体的にご記入ください。図自体に対するご意見でも構いません。

2016年11月21日

概念や指標の相互関係(仮説や想定を含む)



2.2.2. 選考のプロセス・方法

2.2.2.1. 選考プロセス

選考プロセスについては、回答のあった AD7 人全員が「改善すべき点はあるが、それなりに機能していた」と回答している。

効果的と思う取組としては、平成 27 年度から導入された「(負担も大きい) 二段階選考」や、「選考プロセスでのやりとり」、「企画調査」があげられていた。特に企画調査については、すべてが対象でもよかったのではないかと、という意見がみられた。

課題としては、「面接時間が少ない」ことや、「領域に対する AD の理解度の違いによる選考への影響」、「一部の(高)評価に左右されてしまう評価システムの問題」、「提案に対する AD のコミットメントが不明確なことによる不公平感(次項、提案を育む機能にも関連)」などがあげられていた。

「シーズ起点の提案が多く、研究者とは別に PJ マネージャーをおくべき」、「可能性のある優れた実践活動を選定し、それに対して研究者をマッチングするという手法もありうるのではないかとするプログラムの仕組みそのものに対する意見もみられた。

【AD 向け】

Q3-1(2)選考プロセスは、社会問題の解決にむけて協働や社会実装を重視した研究開発のプロジェクトを採択するのに有効に機能しましたか？1 つに○をご記入ください。

※ プロジェクトの選考プロセスとは、書類・面接による選考や二段階選考(平成 27 年度より)及びそこでの領域からのコメント、総括面談、ロジックモデルの作成、領域としてのリサーチクエスションの提示(平成 27 年度より)、プロジェクト企画調査の設定を指します。

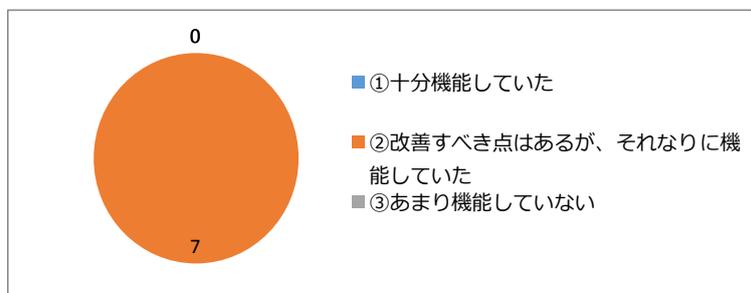


図 4 選考プロセスの有効性 (AD 向け)

PJ 向けアンケート(代表者及び GL)では、自由記入欄で少なくない数の課題が示されている一方、代表者及び GL とも、選考プロセスが構想や計画の具体化に役立ったとする回答が大勢であった。

評価する意見としては、「選考時のコメントをもとにした企画が、結果的に PJ の目玉の一つとなった」、「研究の新たな方向性がえられた」、「PJ 推進体制づくりに活かされた」、「一貫して評価者による建設的な助言を得ることができた。さらに企画調査に採択されたことによって、非常に多くのブラッシュアップの機会を得ることができた」、「毎度のコメントやロジックモデルは PJ の構想をまとめるにあたり機能していた」、「ロジックモデルが提示されたことで、提案の全体構造が明確になり、共同研究者や協力者による PJ への理解が深まった」、「段階を追うごとに、目的意識、趣旨、研究方法、社会実装の方法などに

ついてより鮮明に、かつ具体的になった」、「領域全体のリサーチクエスチョンは、自身のPJにあてはめるとどのようなことなのか、関係ないと思われるものはなぜ自身のPJに当てはまらないのかなど、リスク探しに役立っている」、「スキーム、申請書そのものづくりが、申請側の不備・不足への気づきや意義の再確認に役立っている」といった実質的な効果を指摘するものや、「多世代共創のイメージについて、マネジメント側との間に多少のずれがあったが、選考プロセスが補正するきっかけとなった」、「全体として何を達成しようとしているのか、そのなかで自分たちがどのように振る舞えばいいかがよく分かるようになった」、「ヒアリングを含めたインタラクティブな選考過程は公募側と応募側のコミュニケーションをはかるうえで欠かせない」といったプログラム意図の理解促進効果があげられていた。

一方、課題としては、「多世代領域の定義が幅広すぎる」、「領域としての価値観が必ずしもAD間で統合的にはシェアされてないように感じられ、それぞれのコメントにどのように対応するべきか、どのような方向でPJを展開することが建設的となるか、苦慮することがあった」、「二次審査におけるコメントはPJを明確にするのに実に役立ったものと、まったく的はずれなものが混じっていた」、「委員の顔ぶれが変わるとPJの問題点や改善点に関する指摘、重視すべきポイント等が変わることがあり、多面的な意見を伺えるメリットはあるがその都度の対応に困難を感じることもあった」、「質問の内容と領域テーマとが矛盾する印象のものがみられた。全体として領域AD間でどのような議論がなされ、問題関心が共有されているのか不明」といった領域内のコミュニケーションの問題を指摘する意見が多くみられた。

また、「関係者が複数にわたり、情報共有に時間を要する一方、時間的な余裕があまり与えられなかった点が課題」といった選考プロセスのスケジュールに対する意見や、「関係者の意思を統一するのに予想以上に時間を要したが、その克服こそがプロセス評価のアクションリサーチ研究としてニーズが高い」といった性急な体制づくりを選考段階で求められることへのとまどいを表明する意見もあった。

より具体的なものとしては、「プロセスは機能していたが、2次選考の申請書では似たような内容を何度でも聞かれる印象があり、その結果、作業量が増えた」といった意見や、「選考プロセスのなかで、社会実装をする場合の予算どりや今後の展開におけるアドバイスを頂けたらなおよかった」とする提案もみられた。

その他、「領域における成果の具体的な像が、選考プロセスを通じて十分に描けない」、「ロジックモデルやリサーチクエスチョンについては、研究開発遂行にはあまり意義を持たない」といった指摘もあり、PJによって温度差があることがうかがえる。

【PJ(代表者及びGL)向け】

プロジェクトの選考プロセスは、協働や社会実装を重視したプロジェクトの計画を具体化する上で有効に機能しましたか？1つに○をご記入ください。なお、プロジェクトの選考プロセスとは、書類・面接による選考や二段階選考(平成27年度より)及びそこでの領域からのコメント、総括面談、ロジックモデルの作成、領域としてのリサーチクエスチョンの提示(平成27年度より)、プロジェクト企画調査の設定を指します。

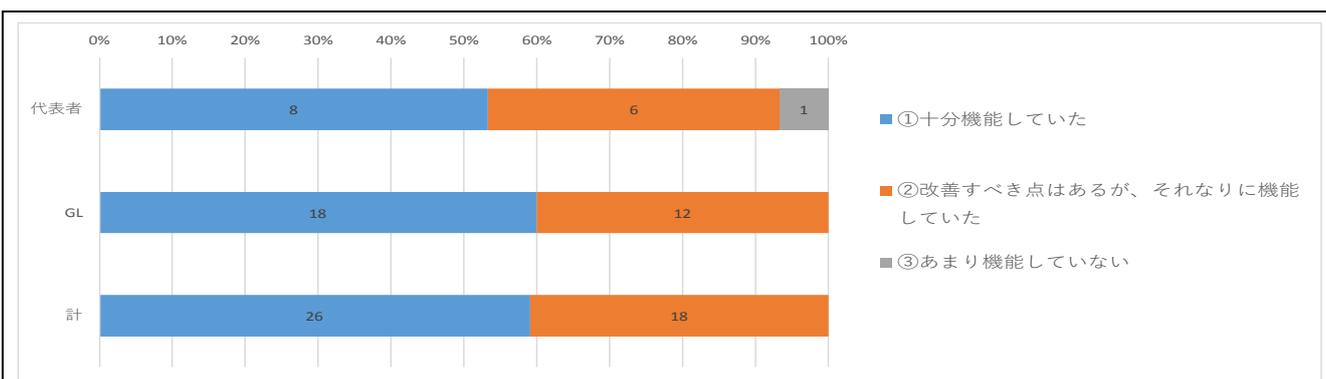


図 5 選考プロセスの有効性 (PJ 代表者及び GL 向け)

これに関わる設問として、PJ 向けアンケートでは、提案、応募するにあたっての PJ メンバーの関与の程度についてもたずねている。

全体として、「アイデアを出す段階からの関与」は 20%程度にとどまるが、多くの PJ では「全員に納得してもらった上で提案」を行っていることが分かる。

【PJ 向け(代表者及び GL)】

プロジェクトを提案、応募するにあたり、プロジェクトメンバー(実施者及び協力者)はどの程度関与しましたか？1 つに○をご記入ください。

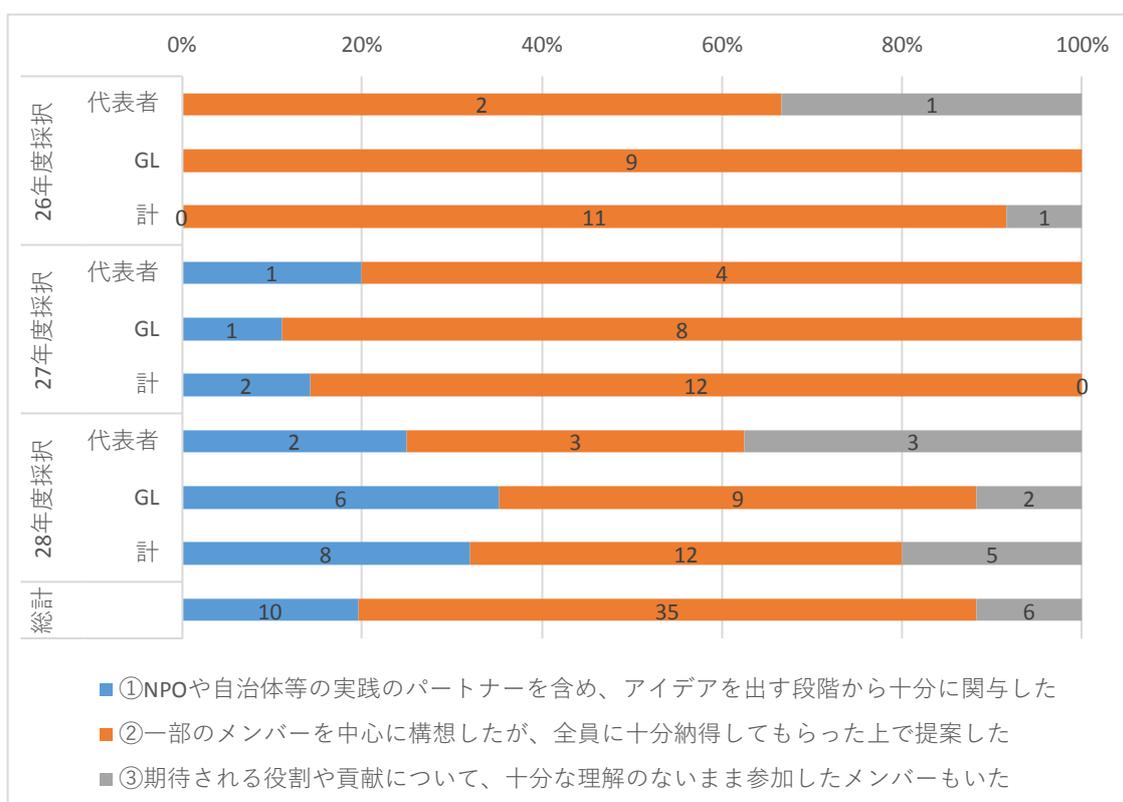


図 6 提案、応募にあたっての PJ メンバーの関与 (代表者及び PL 向け)

「③期待される役割や貢献について、十分な理解のないまま参加したメンバーもいた」を選択した回答者に対し、理想的にはどのようなメンバーがどのような形で関与すべきであったのか等についてあわせてたずねた。

「十分時間をとり、アイデアを出す段階から関与してもらうべきであった」とする回答もみられる一方、アイデアを出す段階からの関与、特に研究協力者の関与の是非については、PJの性格により意見がわかれている。具体的には、「行政との連携において、中心的な職員の異動があると、新たな協力者を得るのに時間がかかる」、「関係者からの協力の調達は重要な研究の構成要素の1つ」、「コアメンバーを少数精鋭に、また協力者は多分野からひろく求めている。この体制そのものが多世代共創の実例」、「協力者に対し、不採択時に迷惑をかけないように、採択前は概略説明にとどめ、後に詳細協議を行うというプロセスをとることはやむを得ない」といった意見があった。

実装の担い手及びエンドユーザーに対しても、同様の質問を行った。

代表者やGL自身が実装の担い手の場合、本設問の対象外であるが（上記の代表者・GL向け設問に回答）、実装の担い手について、回答のあった者のうち、26年度及び27年度採択課題では「採択後の関与」と回答するものがそれぞれ2人いた。

【PJ向け(実装の担い手及びエンドユーザー)】

プロジェクトを提案、応募するにあたり、あなたもしくはあなたの所属する組織はどの程度関与しましたか？1つに○をご記入ください。

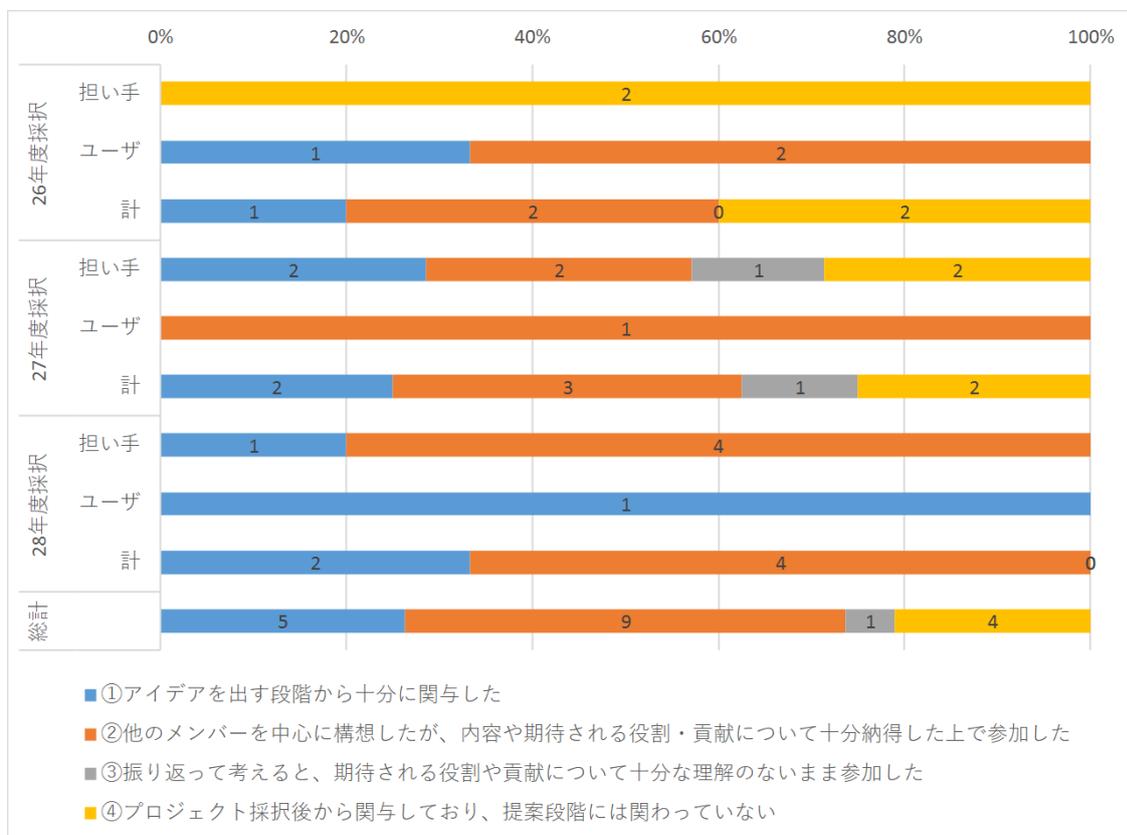


図 7 提案、応募にあたってのPJメンバーの関与（実装の担い手及びエンドユーザー向け）

また、2年度目以降の実装の担い手及びエンドユーザーに対しては、あわせて次のような質問も行った。実装の担い手、エンドユーザーとも、「積極的に関与している」とする回答が80%を占めているが、実装の担い手については「関与が十分とはいえない」とする回答も1人あった。

【PJ 向け(実装の担い手及びエンドユーザー, 2年度目以降)】

プロジェクトの目標達成に向けて、現在、あなたもしくはあなたの所属する組織はどの程度関与していますか？1 つに○をご記入ください。

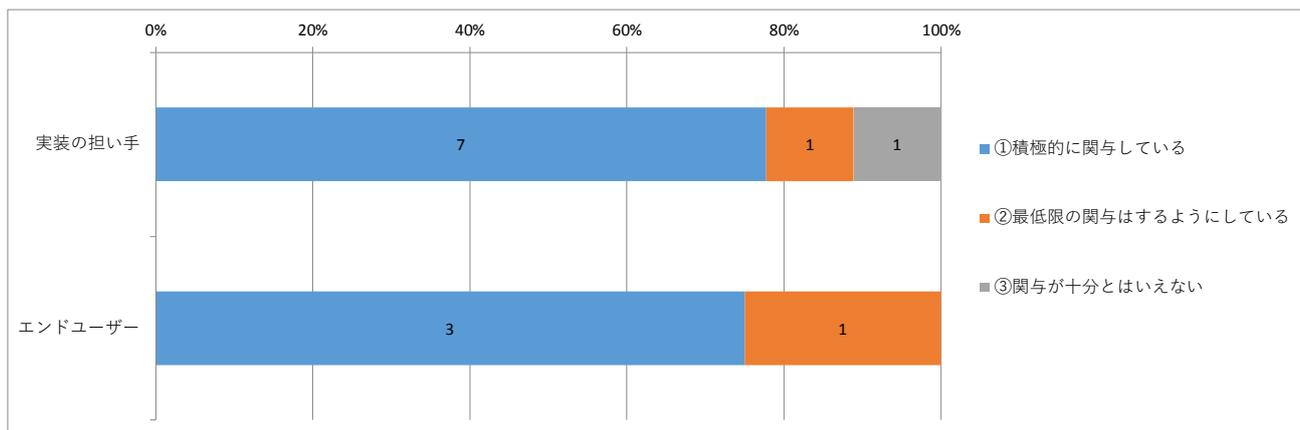


図 8 現在の関与の度合い (2 年目以降、実装の担い手及びエンドユーザー)

関与する上での課題や悩みとしてあげられたのは次のようなものである (いずれも実装の担い手)。

本来の業務を抱えながらの参加による負荷の大きさ、所属組織 (トップ) による PJ 参画への理解、地域住民の巻き込みの不十分さ、検討者と実施者が異なることによるギャップ、採算性といった課題が挙げられている。

2.2.2.2. 提案を育む機能

選考プロセスの持つ提案を育む機能については、回答のあった AD 全員が「十分機能していた」、「課題はあるが、それなりに機能していた」を選択している。

効果的と思われる取組としては、「2 段階選考」や「企画調査」、「総括面談」といったものがあげられていた。

課題及び改善策としては、「大学研究者が (ロジックモデルなど) 領域の方法論に対して馴染みがないため、主旨が十分に伝わっておらず、具体例をみせるのが有効」とする意見や、「説明会と選考会議との議論の乖離の検証が必要」とする意見、「PJ 代表者やメンバーと直接話す場を持つ」とする意見があった。「AD 間の理解や認識の共有が進んではいるが、不十分」という意見もあった。

PJ に関しては、「図 5 選考プロセスの有効性 (PJ 代表者及び GL 向け)」を参照されたい。

【AD 向け】

Q3-1(3) 募集選考プロセスは、提案を育む上で有効に機能しましたか？1 つに○をご記入ください。

※ 提案を育むとは、領域の問題意識やコンセプトとの親和性の向上や方向性の調整、社会問題の解決に向けて協働や社会実装を重視した研究開発計画の具体化や改善等をさします。

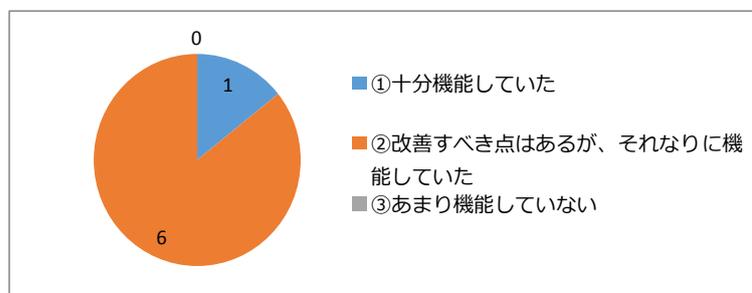


図 9 提案を育む機能

その他、PJ 選考時の評価項目については次のような意見があった。

【AD 向け】

Q3-2. 領域としての成果創出や、「ステークホルダー協働」や「社会実装」を重視したよりよい研究開発のプロジェクトを採択するために、選考にあたってはどのような点を重視すべきとお考えですか？一般枠、俯瞰・横断枠のそれぞれについてご記入ください。参考までに、平成 28 年度の主な評価項目を示します。

<一般枠>

- ① 領域のコンセプトを踏まえている：多世代共創
- ② 領域のコンセプトを踏まえている：持続可能な地域のデザイン
- ③ 研究開発として何を明らかにしようとしているかが明確である
- ④ プロジェクト終了後も何らかの形で活動や成果が社会に根着くことが期待できる：社会実装への展開
- ⑤ 提案を育む価値・可能性がある

<俯瞰・横断枠>

- ① 領域の成果創出・目標達成に貢献するテーマ設定になっている
あるいは、研究開発プロジェクトの成果の統合が期待できる
- ② 領域のコンセプトを踏まえている：多世代共創
- ③ 領域のコンセプトを踏まえている：持続可能な地域のデザイン
- ④ 研究開発として何を明らかにしようとしているかが明確である
- ⑤ 領域マネジメントグループとの対話・協働が期待できる

◆一般枠

- 28年度の評価項目で良い。
- 特に大きく変更する必要は感じないが、社会をどのように変えたいのかというようなワクワクする夢の部分はなかなか見られなかった。また、学術的な新規性も明確ではなかった。この2点はお互いに両端にあるものではあるが、RISTEXというスタンスを考えれば、この2つに解を求めているという評価項目もあってよいような気がする。
- この評価でいいと思うが、③を重視。①と②は前提条件。③に関して、特に、この提案がこれまでどのような研究や活動に基づいて、どこまでわかってきた上で、何に挑戦が行われるのか(明らかにしようとしているのか)を明確にして欲しい。
- 当該テーマに関する経験、実績と既往の活動に対する評価。PJを通してシステムを構築し、それを稼働・運営するための方法論が確立できるか。
- 研究開発期間が終了しても、同様の資金確保が出来る基盤づくりにリアリティがあるかどうかを評価項目に加えたい。事業立ち上げには、3年間は短いので、採択の時に、事前の活動が十分に展開されていることが必要となり、レベルアップのための研究資金の活用が見えるようになる。(出張費や人件費が主では、展望がひらけない)
- 以下の通り：
 - ・ 解決する課題が明確であること:これが具体的でないと、共創・協働は機能しない。総花的、非効率になる → 一般的、定性的。提案している解決策とのロジカルな関係も解りにくいものが多い。
 - ・ GOALの姿が明確なこと → 今年度の②。多くは具体性に乏しい。
 - ・ 解決手段として、「多世代共創」が機能していること → 今年度の①。具体性が乏しい。事業計画書であれば、ここはビジネスモデルに当たる重要な部分。相互関係や量的な関係を示すことが必要。
 - ・ 解決策が持続可能であること → 今年度の④。
 - ・ 協働力・学習能力 → 今年度の⑤。本研究ファンドを使って自分の研究をやりたいのか、本プログラムのテーマにそった研究を提案しているのかを見極める必要がある。

上記の②～④で現在実現できていないものと、そのうち今回の研究で達成されるものを明確にする→今年度③。

◆俯瞰・横断枠

- 採択された研究は、研究者がそれまで行ってきた研究を本プログラムの主旨に読み替えて、研究資金を獲得したと思われるものが多い。俯瞰・横断枠は、アウトプットを明確にしたうえで、募集してもよいのではないか。

(例)集団的幸福(関連はしていても本プログラムの政策効果の計測にはならない)

→ 多世代共創による社会的効用の計測手法の開発(住民幸福度、健康維持等)として募集すべき。

評価項目としては一般論ではなく、設定した課題によって変わるもの。上記の例ならば:

- ・ アウトプットが与えた研究課題に合致しているか
- ・ 研究方法論、手法の適格性

・実用性(利用しやすさ:時間、コスト、要員、結果の解りやすさ)

・汎用性(他地域や様々な事業への展開可能性)

- 多世代共創を促す仕組みや、評価方法を入れる。
- 学術に裏打ちされた新たな考え方、コンセプトや評価指標などが社会に提案できるか？
- H28 評価項目⑤。他の研究や活動と相乗効果があると期待できるかどうか、他の PJ に貢献できるかどうかを重視するといいいのでは。
- 夢や挑戦という部分が希薄であった。

2.2.3. 問題所有者・問題解決者への働きかけ

2.2.3.1. プロジェクト及び潜在的な提案者（問題解決者）に対する働きかけ

問題解決者に対する働きかけとして、まず、PJ の潜在的な提案者に十分にアプローチできたかを AD に対してたずねた。7 人中 5 人がアプローチできているとする一方、2 人はあまりアプローチできていないと指摘している。

効果的と思われる取組としては、提案募集ワークショップをあげる意見があった。大学には十分アプローチできているとする一方、「課題を持つ行政、事業の担い手になりうる地域の企業や社会企業家」が代表者となる提案が結果的に少なく、これらの主体に十分アプローチできていないのではないかと指摘する意見もあった。その指摘の背景には、こうした主体が代表者となり、それを大学が支援するという枠組みの方が成果の活用、普及には望ましいのではないかと、ということがある。これは問題所有者が問題解決者となるパターンであるといえる。

課題としては、領域として求めるところ（どのような対象やステージ（進捗の程度）などを狙っているのか等）を明確にすることがあげられていた。なお、こうした課題は選考プロセスでの議論を通じて改善しており、より一般的に訴求できるアプローチを考えていくことが検討課題である、としている。

【AD 向け】

Q3-1(1)プロジェクトの募集方法は、領域の求めるプロジェクト提案をしてくれそうな潜在的な申請者に対し、十分にアプローチできたと思われますか？1 つに○をご記入ください。

※ 取組の例: RISTEX のウェブサイトや JST のメーリングリストでの情報発信、募集説明会、シンポジウム、提案募集ワークショップ、アドバイザーのネットワークを通じたメーリングリスト等への展開、等

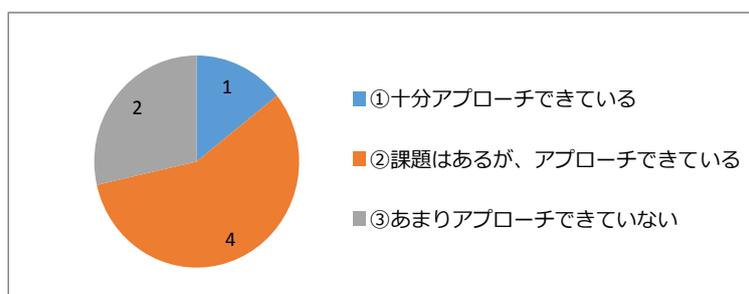


図 10 潜在的申請者に対するアプローチの十分性

一方、公募要領の記述や公募説明会、提案募集ワークショップなどにおける説明について、PJの代表者及びGL向けアンケートの結果をみると、「十分役に立った」、「十分とは言えないが、実際の内容と大きな齟齬はなかった」とする回答が70%を超える一方、「実際に活動してみると、想像していたものと異なっていた」「公募要領を十分読み込んでおらず、説明会や提案募集ワークショップなどにも参加していない」とする回答も一定数あった。

採択年度別では、採択から時間が経過している影響もあってか、一見すると平成26年度採択課題関係者の評価が高くみえるが、自由記入欄とあわせてみると、平成27年度、28年度の関係者のほうが取り組みの効果を指摘する声が多い。たとえば、「一般の実践者からみると、専門用語が多く理解しづらかった(H27)」といった改善点を指摘する意見も一部にはあったが、「公募要領の記載(Ⅱ募集・選考にあたって本領域が求めるもの)は、募集の背景にある情勢の理解に役に立った(H28)」、「公募要領は十分に詳細に記載されており、趣旨をよく理解することができた(H28)」、「各種申請書および提案書の書式および記載事項・方法がPJに求められているものを反映した内容であり、理解を深めるために十分役に立った(H28)」、「提案募集ワークショップでは、ADや他の応募予定者と意見交換をすることができ、領域の考え方を理解したり、提案のアイデアの源泉となった(H28)」、「テーマ自体の抽象度が高く公募要領を読んでもつかみきれないが、特に公募説明会のあとの別室での質問コーナーは、理解を深めるうえで役に立った(H28)」といった意見がみられた。26年度の採択者の中には「初年度はどのような提案が期待されているのかわかりにくかったが、それ以降の年度からより明確になったのではないか」とする意見もあり、年々改善されているともいえる。

【PJ向け(代表者及びGL)】

公募要領の記述や公募説明会、提案募集ワークショップなどにおける説明は、領域が各プロジェクトに求めているものを理解するのに十分役に立ちましたか？1つに○をご記入ください。

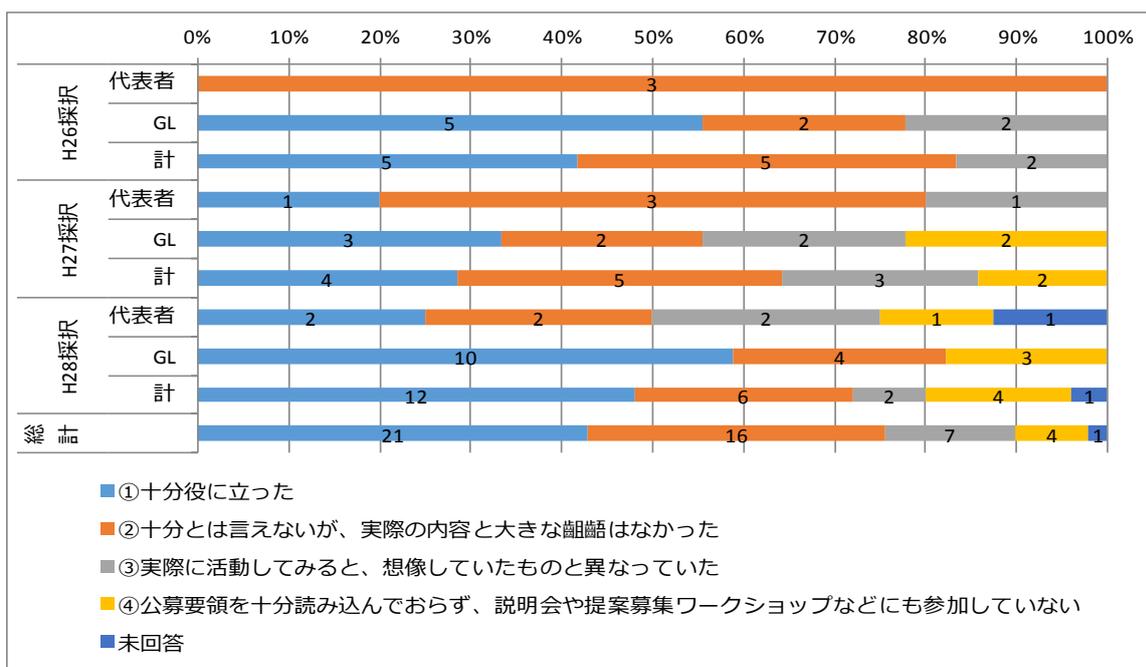


図 11 公募説明会等の明快さ

また、「多世代共創というキーワードについての理解は、研究を進める中で進展していった (H26)」、「多世代共創の考え方について、必ずしも確立された定義があるわけではなく、領域で行われる様々なPJを通して概念そのものも確立していこうとしていることがよく理解できた (H28)」といった領域としての意図を十分に理解していると思われる意見もある一方、「多世代共創の意味が広義、狭義とあり、なかなかコンセンサスが得られなかった (H26)」、「領域のテーマ自体が広範囲なので、幅を狭くした方が良いと思われる (今回応募しなかった研究者からの意見) (H28)」というコンセプトのあいまいさを指摘する意見や、「(自分野では) 何かを開発し、その評価結果がよければ成果が出たことになるが、この領域ではどのようなことが成果と見なされるのか未だ分からない (H26)」、「公募の説明でも社会実装の重要性について述べられていたが、開始後半年後くらいまであまり認識できていなかった (H26)」、「持続可能性の解釈が発言者により十分統一されていないが、本領域の学際性によるものでやむを得ない側面もある (H27)」、「ワークショップに参加したことで大枠は理解できたが、多世代共創という聞きなれない言葉に領域が求めているものは、合宿や企画調査を経てやっと理解できた。記述だけでイメージするのはそもそも難しい (H28)」といったトランスディシプリナリー研究自体の困難性を指摘する意見もあった。関連して、「各PJに求めている内容は理解したつもりだが、実際にそれを実装させ、機能させていくことが想像以上に難しい (H26)」、「当初想定していたよりは、開発の部分よりも住民へのワークショップなどの現場活動が重要視されているイメージ。開発と普及は表裏一体であり、そこに齟齬があった (H27)」、「目的、目標とするものがプラグマティズムに重点を置きすぎではないか (H27)」とする意見もみられた。

その他、領域マネジメントや資金制度の理解に関する意見もみられた。具体的には、「内定以前の段階で、さまざまな指示を頂けるとありがたい」、「領域事務局やADからの要望が予想以上に多く(強く)、補助や助成事業でなく、業務委託であることについて十分理解をしていなかった」、「領域マネジメントグループとの対話については、その趣旨が公募要領等においても記載されていたが、合宿への参加、領域マネジメントグループとの定期的な意見交換、領域リサーチクエスション検討会など、質、頻度ともに応募前の想定以上だった」といったようなものである。これに対し、「PJ参加者の感想、体験談などの情報があるとそのギャップは小さくなるのではないか」といった提案もあった。

2.2.3.2. ステークホルダー等への働きかけ

領域の考えるコンセプト・成果の普及・展開の潜在的な担い手、成果の受け手(利用者、受益者)等への働きかけについて、こうした主体とのネットワーク形成や拡大、強化に向けた取組に対する評価をADに対してたずねた。

「課題はあるが、効果的である」とする回答が7人中3人、「あまり効果的ではない」とする回答が4人あり、働きかけが十分とはいえない状況があきらかになった。

課題として、「伝える内容がより重要であり、誰にとってどのようなメリットがあるのかを具体的、定量的に示す必要がある」という意見(企業、NPOであれば事業の成立可能性、自治体であれば必要な投資や効果など)や「受け手は明確だが、担い手を探すことが重要」とする意見、「RISTEXシリーズといった統一感をもった紙媒体など、一般に関心をもってもらえるようなものを発行すること」、「成果の普及の手法やアウトリーチについて、実績やアイデアのあるメンバー等との連携(ex. 家中PJ-GLのNPO法人ドットファイブトーキョーの原口氏)」といった提案があった。

その他、個別 PJ に対して、「ロマンとリアリズムを兼ね備え、運動として参加する市民、研究者の集まりとして評価している」一方、「主たる当事者は自治体なので、そことのコンタクトを強める工夫が必要」とする意見もあった。

【AD 向け】

Q2.2(3) 領域の考えるコンセプト・成果の普及・展開の潜在的な担い手、成果の受け手(利用者、受益者)等とのネットワークの形成、そして、その拡大や強化に向けて、領域としての取組は効果的と思われますか？1 つに○をご記入ください。

※ 取組の例: 公開のシンポジウムやワークショップ、16 プロジェクトの推進、ウェブサイトでの発信、アドバイザー個人による関係者への働きかけ、等

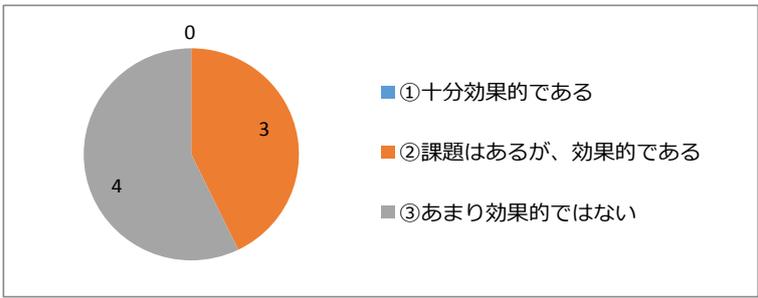


図 12 領域としてのステークホルダーへの働きかけ

PJ (代表者及び GL 向け) に対するアンケートにおいても、同様の質問を行った。代表者及び GL では、26 人中 6 人 (23%) が「あまり役にたっていない」と回答している。

自由記入欄をみると、合宿等による「PJ 間の連携」の効果を評価する意見や、「直接的に役立ってはいないが、JST/RISTEX の研究 PJ であるということが拡大に寄与している」、「サイトビジットや PJ の全体会合に出席していただけることで、自治体の関係者などにはよい影響を与えていると思う」、「マネジメント側を介した受益者やエンドユーザーとの新しい連携が生まれたことはないが、必要に応じてインクルーシブデザインを手がける団体とのコミュニケーションの場を提供してくれており、非常に有意義」とする意見もみられた。

一方、「成果の受益者やエンドユーザー、他分野の研究者等とのネットワークを拡大することについて、領域マネジメントグループに関与していただいたことはない」、「領域 AD とはほとんどコミュニケーションがない」、「当初は現場視察や PJ への積極的な関与に基づく助言などを期待していたが、十分とは思えない」という指摘や、「現在のエンドユーザーとのネットワークは PJ 内で構築してきたことが大きい」、「支援・助けを受けようという意識がそもそも本 PJ にはない」とする意見があった。

改善課題としては、「他分野の研究者との交流のきっかけになるので役に立っているが、他の自治体へ本 PJ が横展開するコネクションは今の時点ではまだできていない」、「我々とは異なる視点で取り組んでいる他 PJ の研究は刺激になり交流の動機付けには役立ったが、まだ実際に実効的な交流ができていないわけではない」、「多面的な意見が聞けることはメリットであるが、準備に割く時間が長くなると、マイナス面も生じる可能性がある。効果を最大にするには、適度な回数、時間の設定が重要」とする指摘もあ

った。

【PJ(代表者及び GL 向け)】

成果の受益者やエンドユーザー(政府・自治体、各種団体等の利害関係者、市民等)、他分野の研究者等とのネットワークを拡大する上で、領域マネジメントグループの関与は役に立っていますか？1 つに○をご記入ください。(関与の例:日常的なコミュニケーション、サイトビジット、進捗報告会、領域合宿、シンポジウム、研究者や実践者の紹介、領域ウェブサイトでの情報発信、等

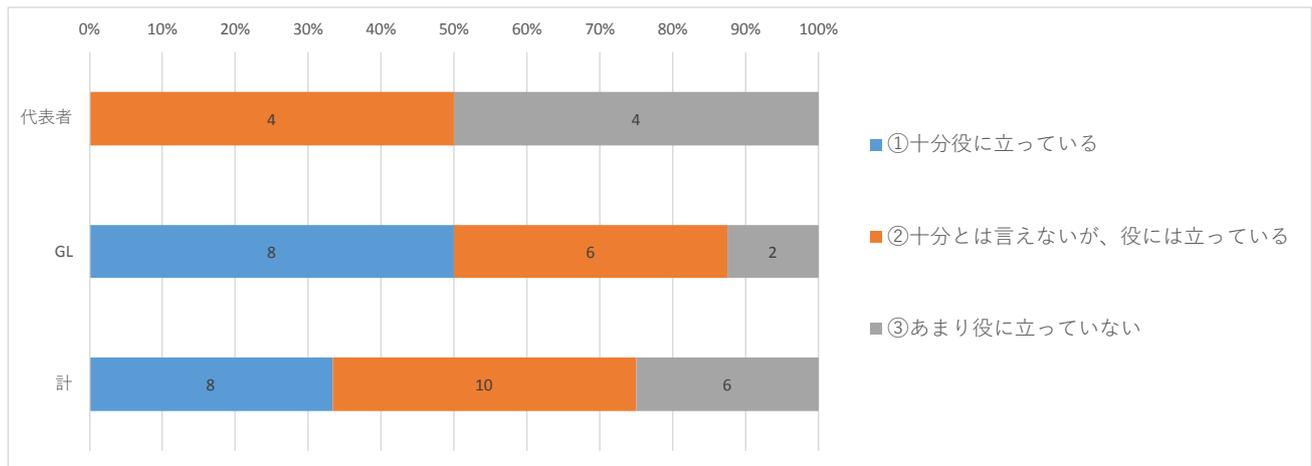


図 13 ネットワーク拡大への領域マネジメントグループの関与の有効性

エンドユーザーに対しては、「領域や PJ 側から必要な働きかけ」についてあわせてたずねた。

具体的には、次のような要請があげられた。

- 成果の普及展開に向けては、組織トップへのプレゼンなど、本研究の成果が自治体の政策立案等へのメリットとなっていることを説明することが必要。自治体の施策の重点などを踏まえ、研究成果と施策効果が重なるウィンウィンの関係になることが必要。
- 幹部職員等を対象に、研究成果の発表や政策提案をしていただく機会を設定できると良い。
- 研究成果に関する十分な情報提供
- PJ のメンバーとできるだけ多く顔を合わせ、直接話をする機会を多く設ける (実際に多くの機会を設けていただいていることに感謝している)。
- 成果に関する市民や行政職員にもわかりやすいパンフレットの提供 (要点を絞った PR 版)
- 地域住民との共創に関する具体的な事例の提示
- 将来的なシステム運用や新たに設置を目指す専門機関との連携にかかる費用対効果の提示

2.2.4. 運営や活動状況についてのモニタリング

2.2.4.1. コンセプトの深化に向けた領域としての取り組み状況

領域としての問題意識や目指す社会の姿、コンセプトの深化に向けて、領域としての取組は効果的と思うか、AD に対してたずねた。

回答のあった 6 人全員が「課題はあるが、効果的である」としている。

対外的にアピールすべきものとしては、「自然科学と社会科学、アカデミアと実務、クロスセクターで行われていること」や、「合宿でみてきたPJ間での相互作用の可能性」があげられていた。

今後取り組むべきことや改善点として、「プラットフォームを形成することによって、領域や各PJの方向性を明確化し、その下で質の高い対外アピールを継続していくこと」、「多世代共創、持続可能という切り口で、領域としての成果を骨太に示し、進捗や成果を俯瞰的に検討して発信していくこと」、「何をしたか（研究内容）ではなく、持続可能に関する要素がどの程度変わるのか、社会の持続可能性を図る諸指標といった数字で示していくこと」、「すでに成果がみえはじめたPJから、順次ウェブサイトで紹介していく（ex. 古川PJの対象地域で行った「90歳ヒアリング」の結果、内田PJで集落の幸福度調査手法が確立された段階で、ADが関わっているいくつかの地域などで測定し、その幸福度を促進させるためのアドバイスを行ったり、幸せな地域の紹介をするなど）」、「意欲のある地方公務員の能力を引き出すようなPJ編成の検討」といったものがあげられた。

【AD向け】

Q2-1(2) 領域としての問題意識や目指す社会の姿、コンセプトの深化に向けて、領域としての取組は効果的と思われますか？1つに○をご記入ください。

※ 取組の例：マネジメントグループ内での勉強会（平成26年度3回）、バックキャストのミニワークショップ（平成27年度）、リサーチクエスションの設定、キーワード集の作成、多世代共創事例の収集、公開のシンポジウム及びワークショップの開催、16プロジェクトの推進等

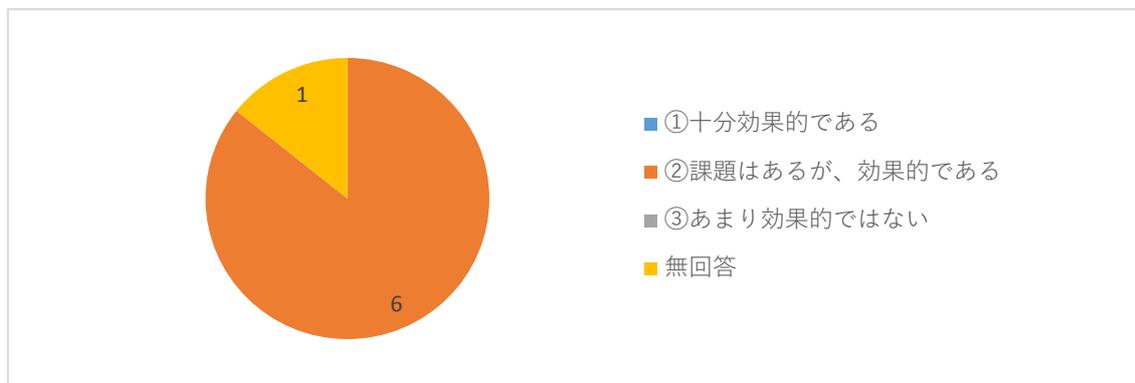


図 14 コンセプトの深化に向けた領域としての取り組みの効果

Q2-1(4) 領域としての問題意識や目指す社会の姿、コンセプトの深化に向けて、特に効果的と思う取組や、成果として対外的にアピールすべきものがあれば、具体的にご記入ください。また、改善すべき課題や、領域として今後取り組むべきことについてのアイデアがあればご記入ください。

2.2.4.2. プロジェクトへの関与

採択後のPJへの関与に関しては、「(十分もしくはそれなりに) コミュニケーションがとれている」とする回答が5人であったのに対し、「コミュニケーションが十分にとれているとはいえない」とする回答も2人あった。

優れた点としては、「採択後も関与し、協働するという姿勢そのもの」、「サイトビジット」、「領域合宿」

があげられていた。

課題及び改善点としては、「各サイト間の交流をより活性化させること」、「合宿における情報共有を超えた取組（共通テーマでの議論やPJ終了後の事業計画策定等の共同作業等）の実施」、「担当ADの人数増加（各PJに最低3人）」、「担当PJ数の絞り込み（2件以内）とPJとの交流頻度の増加（少なくとも2か月に1度）」、「担当AD間の議論の機会創出」といったことがあげられていた。その他、「サイトビジット等のイベント開催に関する連絡調整の問題」などロジ的な面での課題を指摘する意見もあった。

【AD 向け】

Q3.4(1) 領域では、採択後もプロジェクトに対しての関与（例：日常的なコミュニケーション、サイトビジット、進捗報告会、領域合宿、シンポジウム、研究者や実践者の紹介、領域ウェブサイトでの情報発信、等）を行っています。これらを通じて、担当プロジェクトを中心に十分にコミュニケーションがとれていますか？

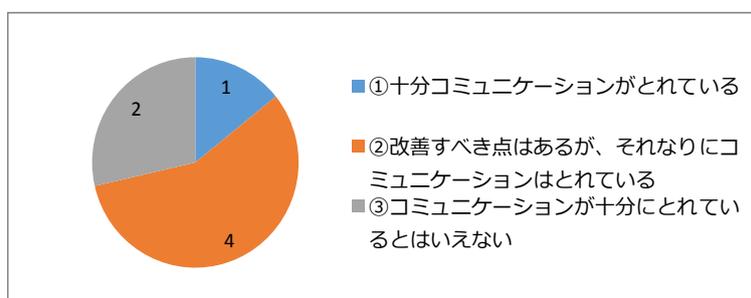
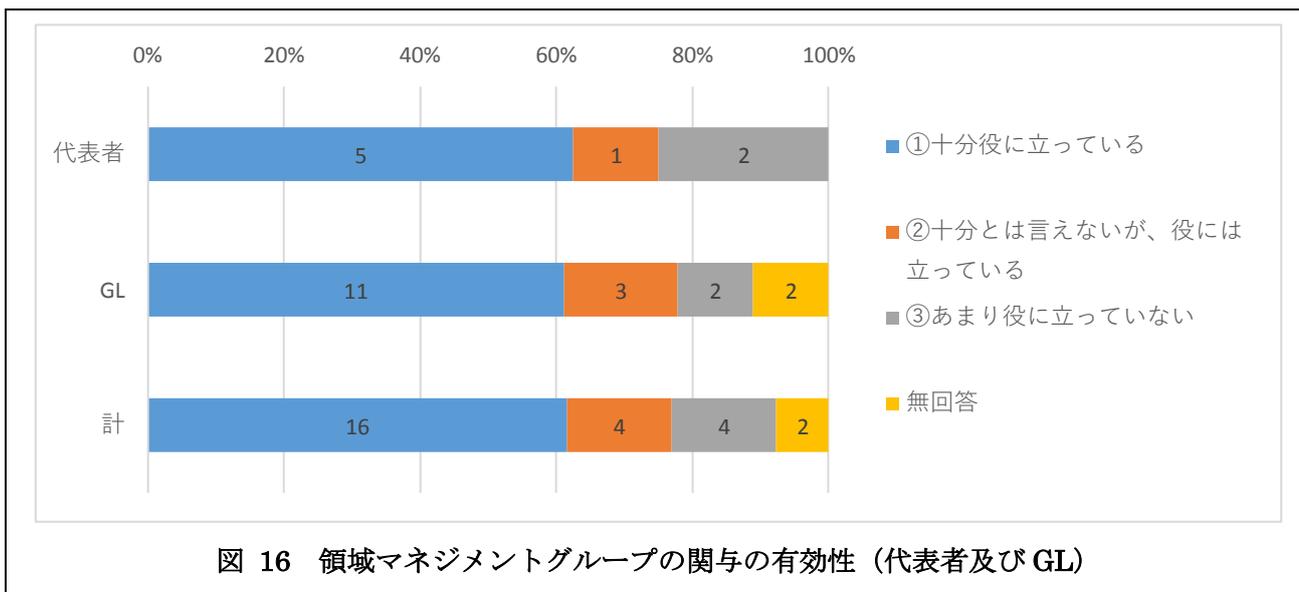


図 15 担当PJとのコミュニケーション

一方、PJ向けアンケートでは、各PJの目標創出に対する領域マネジメントグループの寄与について、代表者の7割以上、GLの8割以上が何かしら役に立っていると回答している。

【PJ向け(代表者及びGL)】

各プロジェクトが目標とする成果の創出に対し、領域マネジメントグループの関与は役に立っていますか？1つに○をご記入ください。（関与の例：日常的なコミュニケーション、サイトビジット、進捗報告会、領域合宿、シンポジウム、研究者や実践者の紹介、領域ウェブサイトでの情報発信、等）



役立っているものとしては次のようなものである。

マネジメントグループの関与全体に対しては、「密なやりとりを継続することで、相互の考え方の理解が進んだ」、「現実的な問題が生じた際に真摯に対応していただき感謝している」、「技術開発が中心で、社会的アプローチが不足している中、様々な形で継続的に指針を示してもらったことで、研究の方向性を間違えずに済んだ」という肯定的な意見がみられた。

「サイトビジット」や「シンポジウム」、特に「領域合宿」が他のPJの動向や領域全体の方向性を確認する上で有効と評価する声が多かった。「領域合宿」については、「異なる視点を頂けるので役に立っている」、「研究展開に役立った」という意見もあった。

「サイトビジット」については、「PJの今後の方向性を明確化したり、計画の具体化、推進に非常に役立っている」、「サイトビジットに向けて準備を進めることで工程管理上も大変有効」とする意見がみられた。

その他、「進捗報告会」での意見交換や、そうした機会を捉えた「ADからの有益な助言と建設的な批判」を評価する意見もあった。

一方、次のような課題も指摘されている。

AD制度に関して、「多忙なためサイトビジットがほとんどなく、どのように関与してくれるのかが分からない」、「現場視察やPJへの積極的な関与に基づく助言などを期待していたが、十分とは思えない」、「(人によって)混乱している発言や矛盾する指摘が少なくない」、「自身の経験や知識への固執」、「PJの全体像に対する理解が不足しており、適切とは思えない助言がある」といった指摘があった。

「日常的なコミュニケーションの不足」を指摘する意見もあった。一方、「領域からの要求事項がその内容や量に比して短い期限で提示され、その対応にエフォートが割かれてしまうことで、巨視的・長期的・現場との協調的な視点で計画を進めることに苦労した」とする声もあった。

比較的評価の高い領域合宿についても、「領域間の交流と領域テーマの共有以外の要素が今のところみつかっていない」とする意見もあった。これに関わるものとして、「シンポジウムや合宿の回数が限られており、各PJに割かれる時間も短いため、PJ同士が深く理解できていない。アプローチが似たようなグループ同士での合宿などもあってよいのではないか」という提案もあった。

2.2.4.3. アドバイザーに求められる役割及び改善点

上記に関連して、AD に求められる役割に対する認識について、AD にたずねた。

優先順位としては、「⑤プロジェクトの改善や成果の実装に向けた提案や助言」をあげる回答が最も多く、「④サイトビジット等を通じたプロジェクトの進捗および課題の把握」と続く。

PJ レベルでの支援が中心であるが、「課題の募集、採択、実施に係る①、②、③（アンケートの選択肢番号）はワンセットであり、その上位に多世代共創、持続可能領域としての成果創出がある」とする意見もあった。

【AD 向け】

Q3-5(1)アドバイザーに求められる役割として、ご自身はどのようなことを担われ、重視していますか？該当するものについて、凡例を参考にしながら優先順位をご記入ください(いくつでも可)。

表 4 アドバイザーに求められる役割

選択肢	優先順位(回答数)				
	1	2	3	4	5
①募集に向けた検討課題の整理と企画に対する助言	1	1	1	1	0
②募集要項の記述内容等に対する助言	0	0	0	0	0
③プロジェクトの計画書や報告書の精査	0	1	2	0	0
④サイトビジット等を通じたプロジェクトの進捗および課題の把握	1	5	1	0	0
⑤プロジェクトの改善や成果の実装に向けた提案や助言	4	2	0	0	1
⑥領域としての成果創出への寄与	1	0	2	2	0
⑦領域内外のステークホルダーとのネットワーク形成への寄与	0	0	0	1	0
⑧その他	0	0	0	0	0

AD 自らが考える「AD 制度に対する意見や改善点」としては、次のような意見がよせられた。

PJ に対する支援体制に関して、「AD の専門性を「ニーズ・課題」、「シーズ・解決策」、「事業化」と3つに分け、PJ で欠けている部分を補完するよう AD を配置すべき」、「担当 PJ は2件以内に絞り、少なくとも2ヶ月に1回は、訪問、打ち合わせ、などを行う必要がある。それくらいの関わりを持たなければ、AD としては機能しないのではないか」という意見があった。

AD の関与の仕方に関連して、「負担は大きいけど、よい制度だと思う」と評価する一方で、「積極的に関与する AD が固定化されつつある」という現状の課題や、「特定の分野や考え方に過度に焦点を当てることで、基本であろう Transdisciplinary から逸れる可能性もある」という指摘があった。これらに関し、「活動や専門の分野が異なる AD が結集することで、多様な情報・知見と多様な考え方を効果的に得ることが可能であり、それぞれの分野を超えた俯瞰的な視点からの対応が求められる」という意見や、「助言もできる方が大勢いるが、むしろ進捗をたずねることで PJ の自己点検の支援ができればいいのではないか」といった意見がみられた。

PJ 支援を超えた AD の役割としては、AD を異なるセクターを背負ったステークホルダーと捉え、「しるべき根拠（適切に選択された指標によって合理的に定量された結果）に基づいて、出来るだけ多く

の AD 間での意思疎通とコンセンサスを得るプロセスもまた重要であり、身近にある研究対象」とする意見もあった。

領域マネジメントグループ内でのコミュニケーションについては、回答者 7 人全員が何かしらの改善が必要であると認識している。

コミュニケーションはとれているとしつつ、「一堂に会しての会議には限界があり、PJ ごとに採択者と AD 数名で密に議論する場があってもよい」とする意見や、「多様な専門性や価値観等を持つ AD の有効活用法について、低関心の AD の意見を聞くのがよいのではないか」とする意見、「AD 同士のコミュニケーションはあまりないが、実装や研究に寄与できる可能性がある」とする意見があった。

【AD 向け】

Q3.4(2)よりよい領域成果の創出に向けて、領域マネジメントグループ内でのコミュニケーションは十分にとれていますか？1 つに○をご記入ください。

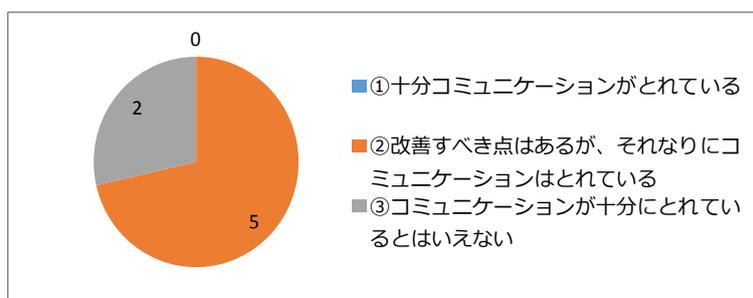


図 17 領域マネジメントグループ内のコミュニケーション

2.3. 目標達成に向けた進捗状況等

本評価項目では、「①アウトプット・アウトカムの見込み」、「②目的適切的なプロジェクトの推進」、「③目標に照らしたプロジェクト評価」、「④具体的な課題の明確化」、「⑤改善の可能性」について検証することになる。

本調査では、「①アウトプット・アウトカムの見込み」、に関して、「仮説として設定した問題群及びフレーミングの妥当性等に関する領域としての検証及びエビデンスの形成」、「多世代共創」「持続可能性」の実践コミュニティの形成、「実践コミュニティの形成に向けたアクターの変化」という 3 つの観点から分析を行った。

2.3.1. 仮説として設定した問題群及びフレーミングの妥当性等に関する領域としての検証及びエビデンスの形成（アウトプット）

2.3.1.1. 領域のコンセプトの深化

AD に対し、領域の設定した問題意識や目指す社会の姿、コンセプトが深化してきたかたずねた。7 人中 1 人が「期待以上に深化してきている」、6 人が「それなりに深化してきている」を選択している。

【AD 向け】

Q2.1(1) 領域での活動や研究が進んできた現在において、領域の設定した問題意識や目指す社会の姿、コンセプトは深化してきたと思いますか？該当するもの 1 つに○をご記入ください。

※ ここでいう「問題意識やコンセプトの深化」とは、「多世代共創」による「地域デザイン」が「持続可能な社会の実現」に有効であるという仮説や、その背景にある問題意識の検証・検討状況のことをさします。

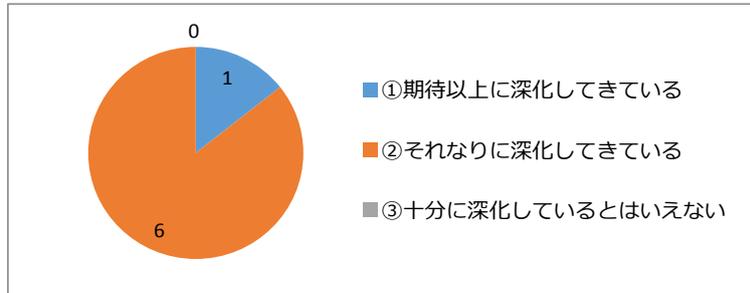


図 18 領域としてのコンセプトの深化

2.3.1.2. 知識・技術の一般化

PJ の代表者及び GL に対しては、活動プロセスや成果に対する一般化・体系化の取組についてたずねた。

「③あまり進展していない」を選択しているのは 26 人中 3 人（全員 GL）であるが、自由記入欄をみると、「全国すべての地域で実践となると人・金・時間がとても追いつかない」、「地域での課題をこなすことで、精一杯」、「現在進行中の試験結果を踏まえて、類似した環境を有する自治体への啓蒙はこれから」、「エンドユーザーに対する働きかけは調査結果の分析を踏まえて行うべきと考える」といった回答が散見される。すなわち、「一般化・体系化」＝「他地域への実践的展開」と誤解している回答が多く、成果の社会実装を強く意識している PJ は多いものの、成果の一般化については十分な理解が浸透していないように思われる。

「一般化・体系化」について正しく理解している回答者の記述をみると、「他の自治体が本プログラムを導入する根拠が必要と考え、本 PJ で開発しているプログラムがもたらす効果（地域と住民への効果）のエビデンスの蓄積に努めている。また、「マニュアル化を目指し、PJ の開発過程を記録している」といった回答や、「地域毎の温度差がある中、どのように汎化させるかに課題がある」、「国内外の他の地域の実績との比較評価が必要」といった課題があげられている。その他、「技術開発を主眼としており、地域は実証実験の場ではあるが、成果の普及・展開においては自地域・他地域の区別はない」とする回答もあった。

【PJ 向け】

成果の他地域等での普及・展開に向けて、プロジェクトの活動プロセスや成果に関する一般化・体系化の取組はどの程度進んでいますか？ 1 つに○をご記入ください。

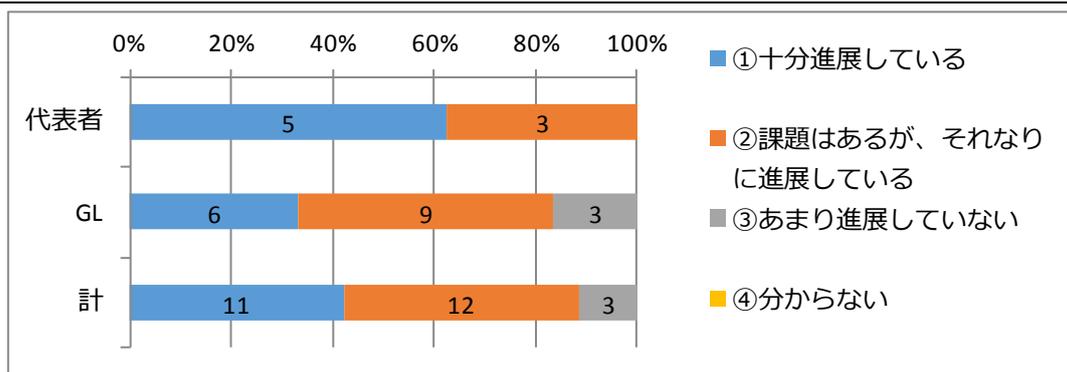


図 19 活動プロセスや成果に関する一般化・体系化の進展

これに関連して、各PJにおいて必要とされる学問的な専門性を確保できているかについて、代表者及びGLにたずねた。

【PJ向け(代表者及びGL)】

プロジェクトの目標達成に向けて、必要とされる学問的な専門性は現在のメンバー構成で確保できていますか？1つに○をご記入ください。

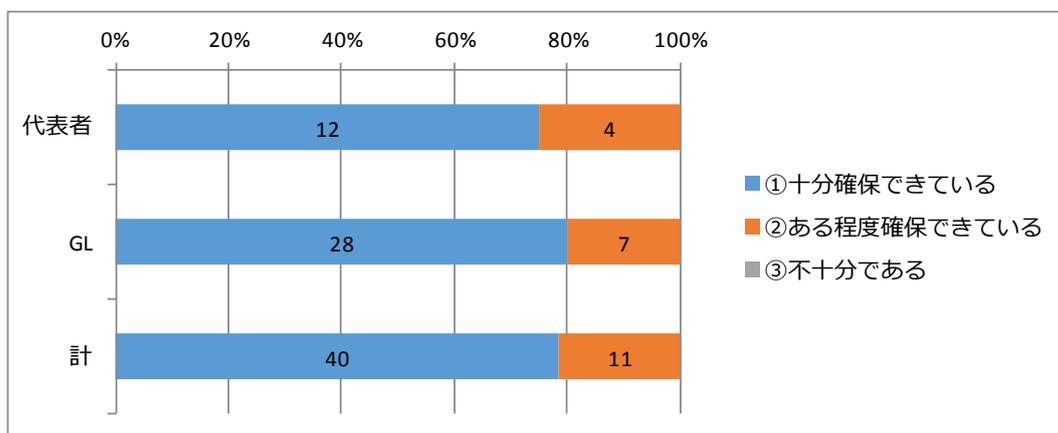


図 20 必要とされる学問的な専門性は確保できているか？ (代表者及びGL)

③不十分であるとする回答者はおらず、役割によらず全体的に自己評価は高い。

一方、②ある程度確保できているとする回答者については、「対象とする問題領域の複雑性に対応するにはPJ単位でのリソースには限界がある」、「必要とする専門人材、特に社会科学系の研究者で関心の高い者が偏在しており、地域によっては確保が難しい」といった課題があげられている。

2.3.2. 「多世代共創」「持続可能性」の実践コミュニティの形成

2.3.2.1. 実践コミュニティの形成状況 (アウトカム)

ADに対し、実践コミュニティ (community of practice) の形成の程度についてたずねた。「それなり

に形成されてきている」が7人中2人、「十分に形成されているとはいえない」が5人、という結果になった。

コミュニティの形成につながる具体的な成果として、「PJ 関係者はコンセプトの最大の理解者であり実践者」であり、「関係者から「持続可能な多世代共創社会のデザインとは…」に関する200字メッセージをもらおうとよい」、「PJ が利用しているユニークなコンセプト、手法はアピールできる」とする意見があった。

【AD 向け】

Q2.2(2)領域での活動や研究が進んできた現在、領域の考えるコンセプトや成果の普及・展開の潜在的な担い手、受け手(利用者、受益者)等とのネットワークはどの程度形成されていますか？該当するもの1つに○をご記入ください。

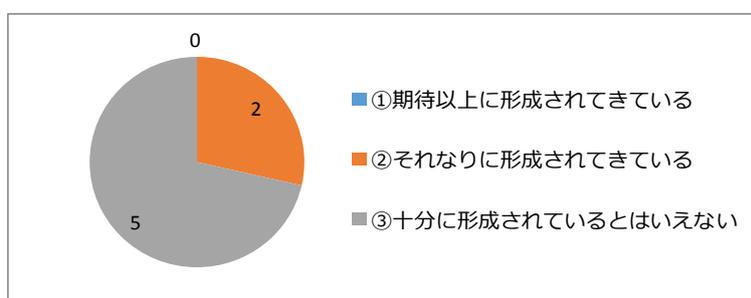


図 21 ネットワークの形成の程度

2.3.2.2. 実践コミュニティの形成に向けた関係者の期待やコミュニティの成熟度 (アウトカム)

本項目に関し、PJ を対象としたアンケートにおいて、まず、「想定している成果の実装の担い手の研究成果に対する期待感」についてたずねた。

回答者の多くが、「期待感を持っている」を選択しているが、一方で課題も認識されている。

その具体的な内容についてみると、研究代表者及びGLからは、「個々の研究成果はあるが、全体で統合されたシステムとできるかどうかは予断を許さない状況にある」、「技術的に新しいシステムであるため、運用における技術的難易度や運営コストについて理解してもらうのにある程度説明と理解が必要である」、「住民リーダーたちが引き継いでいける体制を確保する必要がある」、「現在は効果の検証段階であり、採算などの経営的観点の検討が必須」といったものがあげられている。

実装の担い手からは、「現段階では、当事者に実際にどのような場面でどの程度役に立つPJが進んでいるのか見えていない」、「最終的にどのようなエビデンスを得るのが分からない」、「普及や展開が早いだけに一つ一つのプログラムが手薄になりがち。展開や取り組みにバラツキが出てくる気がする」、「PJ終了後においても地域でシステムが存続していけるかが課題」、「PJの成果は、ライフスタイルの変革を考え、それを実践する人や地域が自己増殖していくような流れを生み出すことにあると考えているため、短期間で本質的な結果が得られるような性質のものではない。そのため、成果を有効に活用できる体制を確立して存続できるか、行政が関わる場合に市政方針としてどのように定着させるか、ライフスタイル変革の検討者と実践者の違いと両者間のギャップをどう埋めるかという課題の克服が必要」、「実装を

想定している中心となる人物または団体の育成が必要」、「予算が不十分」といった意見があった。

【PJ 向け】

想定している成果の実装の担い手(成果を普及・展開する人や組織)は、研究成果に対しどの程度の期待感を持っていると思われますか？1 つに○をご記入ください。

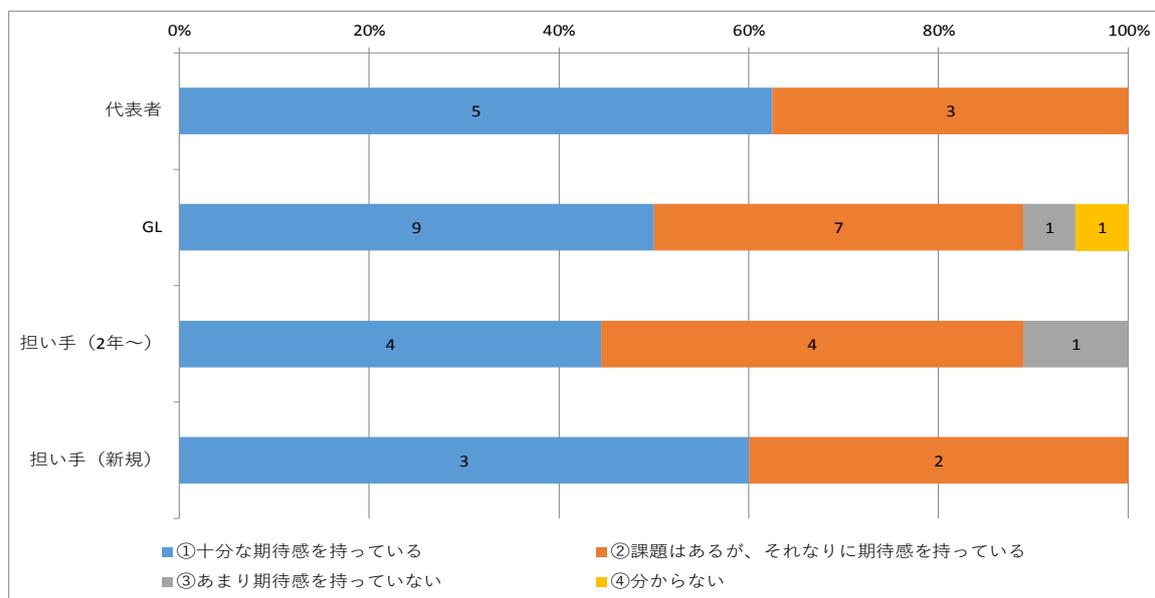


図 22 実装の担い手の期待感

一方、成果の受益者やエンドユーザーからの期待感については、PJ 関係者全員が「期待感を持っている」と自己評価している。

自由記入欄をみると、代表者及び GL からは、「ワークショップへの参加希望者が十分期待した数には届かなかった」、「具体的な政策実施は自治体が担うため、市民や NPO などの首長や議会への信頼が低いと期待感が低くなる」、「地域イベントに重点をおいたため技術開発が少し停滞気味であり、その分不安感を持っている」、「当事者に近いところからの理解は得られているが、一般市民に浸透しているかというとまだまだ足りない」、「受益者である地域住民等は期待を抱いているが、それ以外のエンドユーザーの認知度は今のところ低い」、「類似した環境を有する自治体への啓蒙はこれからの課題」、「高齢者と保護者世代が交流したり、助け合うイメージがつかないとの意見が出されている」といった認識が示されている。

エンドユーザーからは、「研究成果を総合計画等の行政計画の作成に活用することができるか」や「将来的に成果に基づく仕組み(システム)を本格実装し、専門組織と連携を図る場合の費用対効果の検証」が課題であるとの指摘がある。

【PJ 向け】

研究成果の受益者やエンドユーザーは、研究成果に対しどの程度の期待感を持っていると思われますか？ 1つに○をご記入ください。

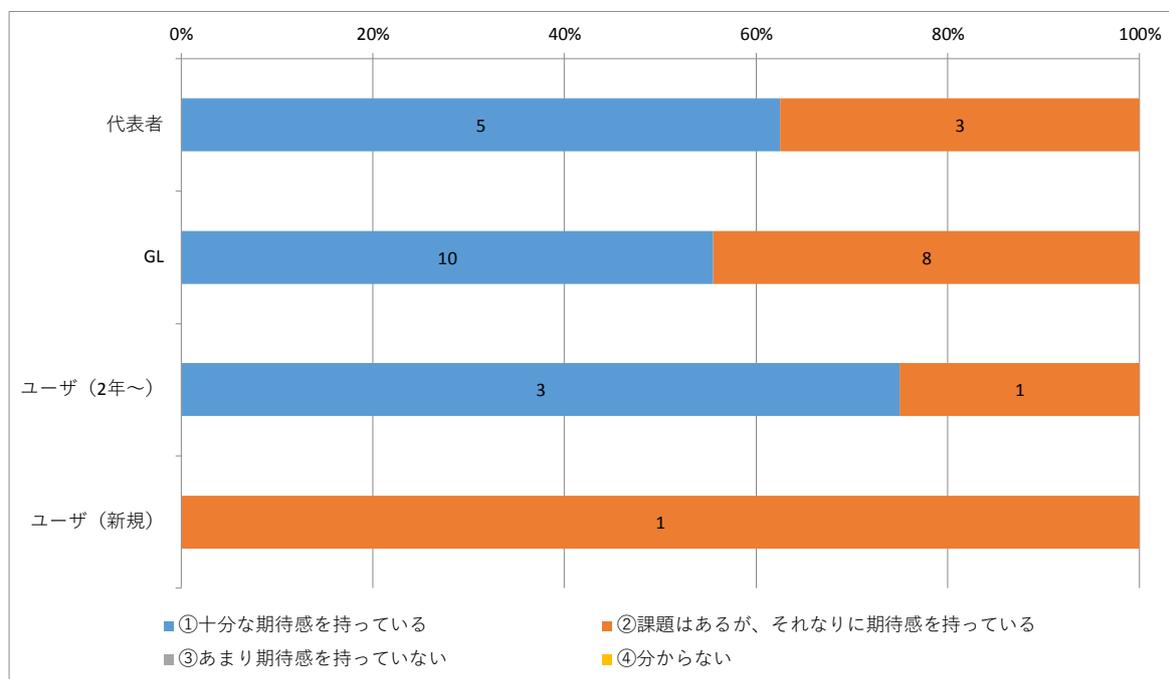


図 23 エンドユーザーの期待感

2.3.3. 実践コミュニティの形成に向けたアクターの変化（アウトカム）

2.3.3.1. アドバイザー自身の変化

領域の活動に関わることで生じた AD 自身への変化については、次のようなものである。

「①これまでとは異なる研究アプローチ等の可能性を感じるようになった」、「③他分野の研究者とのネットワークが広がった」といった研究に関わる効果をあげる意見が 7 人中 4 人と多かった。

その他の効果 (⑩) としては、「他学会他分野の方々と共通認識をもっていることがわかり、多様な社会課題に協働で取り組めることを確信した」とするものがあつた。

【AD 向け】

領域では「ステークホルダー協働」や「社会実装」を重視した研究開発を推進しています。アドバイザーとして領域の活動に関わるようになったことで、ご自身や周りにどのような変化がうまれましたか？該当するものに○をご記入ください(複数可)。

表 5 アドバイザー自身の変化

選択肢	回答数	
	件数	割合
①これまでとは異なる研究アプローチ等の可能性を感じるようになった	4	15.4%
②これまでとは異なる問題解決の可能性を感じるようになった	3	11.5%
③所属する研究コミュニティ(学会等)の研究者から関心をもたれるようになった	1	3.8%
④関連する問題の実践者(政府、自治体、NPO等)から関心をもたれるようになった	2	7.7%
⑤学生や生徒から関心を持たれるようになった	0	0%
⑥所属する組織から関心や理解もしくは支持を得られるようになった	0	0%
⑦政府・自治体の政策や政策プロセスについて、よく理解できるようになった	1	3.8%
⑧研究とはどのようなものか、理解できるようになった	2	7.7%
⑨問題解決の現場の実態について、よく理解できるようになった	2	7.7%
⑩研究や研究者に対する見方、評価がよい意味で変わった	0	0%
⑪実践者に対する見方、評価がよい意味で変わった	2	7.7%
⑫問題解決の現場の実態について、よく理解できるようになった	1	3.8%
⑬他分野の研究者とのネットワークが広がった	4	15.4%
⑭研究者以外の様々な人たちとのネットワークが広がった	3	11.5%
⑮特に目立った変化はない	0	0%
⑯その他	1	3.8%
総計	26	100%

2.3.3.2. プロジェクト関与者の変化

PJ 関与者自身の変化について、まず、代表者及び GL 向けアンケートでは、次のような傾向がみられた。

研究代表者については、変化の内容にばらつきがあるが、GL については、「①これまでとは異なる研究アプローチ等の可能性を感じるようになった(自身の研究に対する影響)」や「⑧研究者以外の様々な人たちとのネットワークが広がった」を挙げる意見が多かった。

その他の効果(⑩)としては、「PJ メンバーの学生 1 名が、現地に移住して研究 PJ を推進している。

また、居場所づくりのハード、ソフト両面からの知見が蓄積された」とする意見があった。

【PJ 向け(代表者及び GL)】

領域では「ステークホルダー協働」や「社会実装」を重視した研究開発を推進しています。領域の活動やプロジェクトに関わるようになったことで、ご自身や周りにどのような変化がうまれましたか？該当するものに○をご記入ください(複数可)。

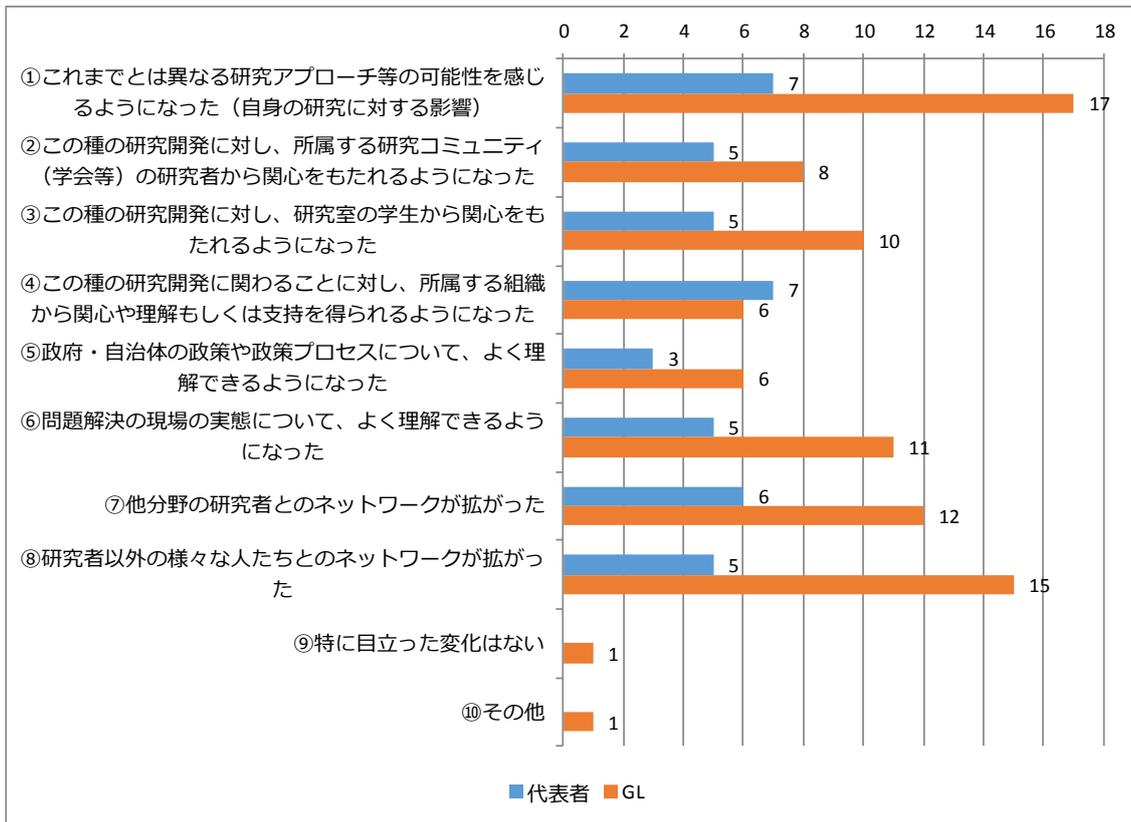


図 24 自身の変化 (代表者及び GL)

代表者 (N=16), GL (N=35)

実装の担い手については、「⑥研究者とのネットワークが広がった」、「⑦研究者以外の様々な人たちとのネットワークが広がった」がそれぞれ半数を超えており、「①これまでとは異なる問題解決の可能性を感じるようになった (自身の実践に対する影響)」とする回答も 4 割強みられた。エンドユーザーについては、「③研究や研究者に対する見方、評価がよい意味で変わった」、「⑥研究者とのネットワークが広がった」とする回答が 5 人中 3 人と多かった。

その他の変化 (⑨) としては、「多世代共創社会の取り組みの端緒として、市民や中学生が研究者と直接関わりながら、研究や実践をするなど、今までにない取り組みができた」とするものがあげられていた。

【PJ 向け(実装の担い手及びエンドユーザー)】

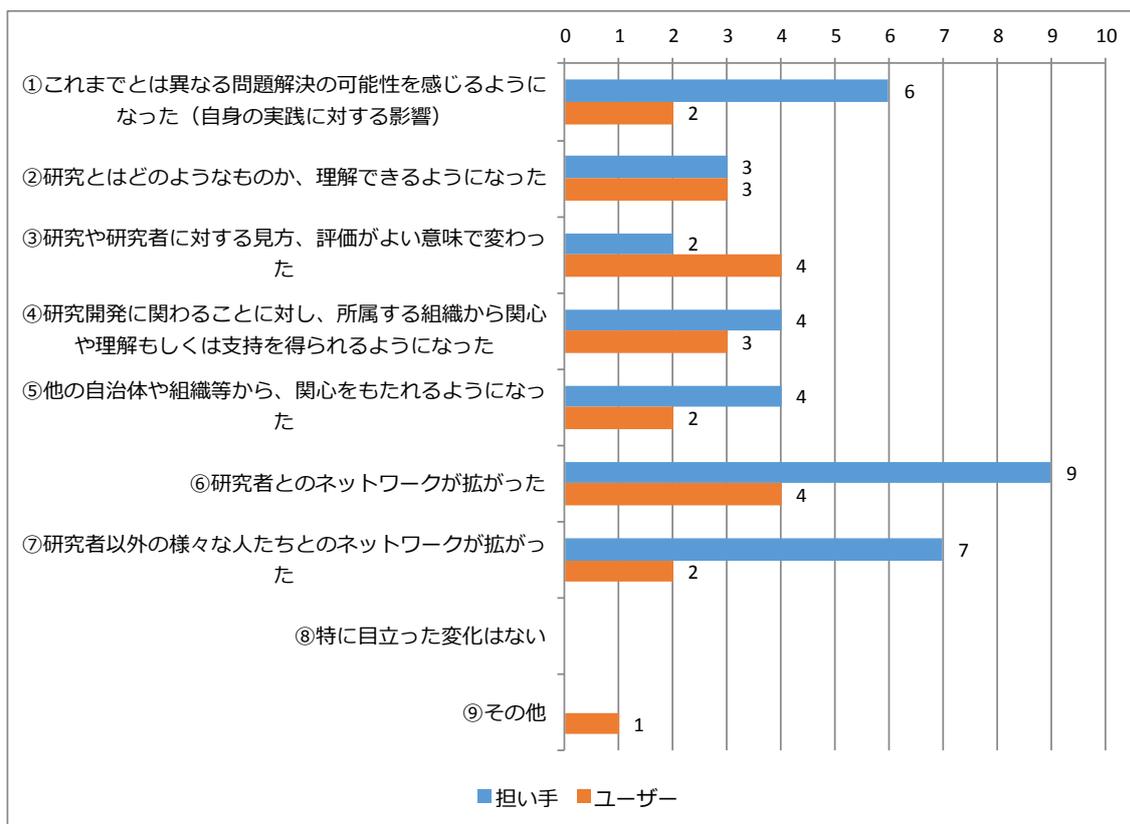


図 25 自身の変化 (実装の担い手及びエンドユーザー)

担い手 (N=14), ユーザー (N=5)

別添資料

「「持続可能な多世代共創社会のデザイン」研究開発領域：領域運営の改善のための「領域の中間評価」に向けたアンケート」と題して実施した以下 5 種類のアンケート調査票を資料として添付する。

- 2年度目以降のプロジェクト／研究代表者・グループライダー対象
- 2年度目以降のプロジェクト／実践のパートナー対象
- H28 新規採択プロジェクト／研究代表者・グループライダー対象
- H28 新規採択プロジェクト／実践のパートナー対象
- 領域アドバイザー対象

「持続可能な多世代共創社会のデザイン」研究開発領域
領域運営の改善のための「領域の中間評価」に向けたアンケート

※以下の設問について、回答者個人のお考えをご記入ください。

※自由記入欄について、スペースが不足する場合には拡大してご記入ください。

1. プロジェクト及び記入者自身について

本設問は、問い合わせが必要になった時のためにご記入をお願いするものです。ご本人と領域マネジメントグループ及び調査委託先(未来工学研究所)以外に閲覧することはありません。

プロジェクト名 (略称可)	
記入者(所属)	

2. プロジェクトの開始もしくは関与のきっかけ

代表者の方はプロジェクトを始めたきっかけについて、グループリーダーの方はプロジェクトに関わるようになったきっかけについて、具体的にご記入ください。

--

3. プロジェクトの状況について(自己診断)

3.1. 研究者の構成について

プロジェクトの目標達成に向けて、必要とされる学問的な専門性は現在のメンバー構成で確保できていますか？1つに○をご記入ください。

選択肢	1つに○↓
①十分確保できている	
②ある程度確保できている	
③不十分である	

↓

②もしくは③を選択した方について、どのような点が課題なのか、具体的にご記入ください。

--

3.2. 研究成果の実装の担い手(成果を普及・展開する人や組織)について

プロジェクトとして想定している研究成果の実装の担い手は、成果を有効に活用できる体制を構築できそうですか？1つに○をご記入ください。

選択肢	1つに○↓
①十分構築できそうである	
②十分とは言えないが、ある程度期待できる	
③このままでは構築するのが難しい	
④実装の担い手について、プロジェクトとしての具体的なイメージがまだない	

↓

②③④のいずれかを選択した方は、課題や理由等について、具体的にご記入ください。

3.3. プロジェクトメンバー(プロジェクト実施者及び協力者)間の協働について

(1) プロジェクトを提案、応募するにあたり、プロジェクトメンバー(実施者及び協力者)はどの程度関与しましたか？1つに○をご記入ください。

選択肢	1つに○↓
①NPO や自治体等の実践のパートナーを含め、アイデアを出す段階から十分に関与した	
②一部のメンバーを中心に構想したが、全員に十分納得してもらった上で提案した	
③期待される役割や貢献について、十分な理解のないまま参加したメンバーもいた	

↓

③を選択した方について、理想的にはどのようなメンバーがどのような形で関与すべきであったのか等、具体的にご記入ください。

(2) プロジェクト内の他の実施者や協力者の持つ専門知、実践知を統合するために、コミュニケーションはどの程度とれていますか？1つに○をご記入ください。

選択肢	1つに○↓
①グループ間や協力者を含め、十分なコミュニケーションがとれている	
②グループ間や協力者を含め、それなりにコミュニケーションがとれている	
③グループ間や協力者を含め、どちらかというとコミュニケーションが不足している	
④グループ間や協力者を含め、コミュニケーションが不足している	

↓

①もしくは②を選択した方は具体的な取組や工夫、頻度等(例:日常的にメーリングリストで情報共有を行うほか、半年に一度全員参加のワークショップを行っている、等)について、③もしくは④を選択した方はどのような点が課題か、具体的にご記入ください。

--

3.4. 成果の受益者やエンドユーザーについて

(1) 成果の社会実装に向けて、働きかけや情報発信を行うべき成果の受益者やエンドユーザー(政府・自治体、利害関係のある各種団体、市民等)として、どのような人々を想定していますか?具体的にご記入ください。

--

(2) 成果の社会実装に向けて、上記に記載した成果の受益者やエンドユーザーに対し、プロジェクト独自に何かしらの働きかけや情報発信を行っていますか?1つに○をご記入ください。

選択肢	1つに○↓
①十分働きかけを行っている	
②十分とは言えないが、何かしらの働きかけを行っている	
③今後働きかけを行う予定はある	
④現在働きかけを行っておらず、明確な予定もない	

↓

①②③のいずれかを選択した方はその内容を、④を選択した方はその理由を、具体的にご記入ください。

--

3.5. プロジェクトの進捗状況について

(1) 想定している成果の実装の担い手(成果を普及・展開する人や組織)は、研究成果に対しどの程度の期待感を持っていると思われますか?1つに○をご記入ください。

選択肢	1つに○↓
①十分な期待感を持っている	
②課題はあるが、それなりに期待感を持っている	
③あまり期待感を持っていない	
④分からない	

↓

(2年度目以降のプロジェクト／研究代表者・グループリーダー対象)

②③④のいずれかを選択した方については、どのような点が課題か、具体的にご記入ください。

--

(2) 研究成果の受益者やエンドユーザーは、研究成果に対しどの程度の期待感を持っていると思われますか？
1つに○をご記入ください。

選択肢	1つに○↓
①十分な期待感を持っている	
②課題はあるが、それなりに期待感を持っている	
③あまり期待感を持っていない	
④分からない	

↓

②③④のいずれかを選択した方については、どのような点が課題か、具体的にご記入ください。

--

(3) 成果の他地域等での普及・展開に向けて、プロジェクトの活動プロセスや成果に関する一般化・体系化の取組はどの程度進んでいますか？ 1つに○をご記入ください。

選択肢	1つに○↓
①十分進展している	
②課題はあるが、それなりに進展している	
③あまり進展していない	
④分からない	

↓

②③④のいずれかを選択した方については、どのような点が課題か、具体的にご記入ください。

--

4. 領域の制度や関与の効果について

(1) 領域では「ステークホルダー協働」や「社会実装」を重視した研究開発を推進しています。領域の活動やプロジェクトに関わるようになったことで、ご自身や周りにどのような変化がうまれましたか？該当するものに○をご記入ください(複数可)。

選択肢	該当するものに○
①これまでとは異なる研究アプローチ等の可能性を感じるようになった(自身の研究に対する影響)	
②この種の研究開発に対し、所属する研究コミュニティ(学会等)の研究者から関心をもたれるようになった	
③この種の研究開発に対し、研究室の学生から関心をもたれるようになった	
④この種の研究開発に関わることに、所属する組織から関心や理解もしくは支持を得られるようになった	
⑤政府・自治体の政策や政策プロセスについて、よく理解できるようになった	
⑥問題解決の現場の実態について、よく理解できるようになった	
⑦他分野の研究者とのネットワークが広がった	
⑧研究者以外の様々な人たちとのネットワークが広がった	
⑨特に目立った変化はない	
⑩その他	

↓

「⑩その他」を選択した方について、具体的にどのような変化がうまれたのか、具体的にご記入ください。

--

(2) 公募要領の記述や公募説明会、提案募集ワークショップなどにおける説明は、領域が各プロジェクトに求めているものを理解するのに十分役に立ちましたか？1つに○をご記入ください。

選択肢	1つに○↓
①十分役に立った	
②十分とは言えないが、実際の内容と大きな齟齬はなかった	
③実際に活動してみると、想像していたものと異なっていた	
④公募要領を十分読み込んでおらず、説明会や提案募集ワークショップなどにも参加していない	

↓

①を選択した方は具体的に何が役に立ったのか、②もしくは③を選択した方はどのような点が課題か、具体的にご記入ください。

--

(2 年度目以降のプロジェクト／研究代表者・グループリーダー対象)

- (3) プロジェクトの選考プロセスは、協働や社会実装を重視したプロジェクトの計画を具体化する上で有効に機能しましたか？1 つに○をご記入ください。なお、プロジェクトの選考プロセスとは、書類・面接による選考や二段階選考(平成 27 年度より)及びそこでの領域からのコメント、総括面談、ロジックモデルの作成、領域としてのリサーチクエストの提示(平成 27 年度より)、プロジェクト企画調査の設定を指します。

選択肢	1つに○↓
①十分機能していた	
②改善すべき点はあるが、それなりに機能していた	
③あまり機能していない	

↓

- ①を選択した方はどのような点がよかったのか、②を選択した方はどのような点が機能し、どのような点が課題か、③を選択した方はどのような点が課題か、具体的にご記入ください。

- (4) 各プロジェクトが目標とする成果の創出に対し、領域マネジメントグループの関与は役に立っていますか？1 つに○をご記入ください。(関与の例: 日常的なコミュニケーション、サイトビジット、進捗報告会、領域合宿、シンポジウム、研究者や実践者の紹介、領域ウェブサイトでの情報発信、等)

選択肢	1つに○↓
①十分役に立っている	
②十分とは言えないが、役には立っている	
③あまり役に立っていない	

↓

- ①を選択した方はどのような関与が役立っているのか、②を選択した方はどのような関与が役に立ち、どのような点が課題か、③を選択した方はどのような点が課題か、具体的にご記入ください。

- (5) 成果の受益者やエンドユーザー(政府・自治体、各種団体等の利害関係者、市民等)、他分野の研究者等とのネットワークを拡大する上で、領域マネジメントグループの関与は役に立っていますか？1 つに○をご記入ください。(関与の例: 日常的なコミュニケーション、サイトビジット、進捗報告会、領域合宿、シンポジウム、研究者や実践者の紹介、領域ウェブサイトでの情報発信、等)

選択肢	1つに○↓
①十分役に立っている	
②十分とは言えないが、役には立っている	
③あまり役に立っていない	

(2年度目以降のプロジェクト／研究代表者・グループリーダー対象)

↓

①を選択した方はどのような関与が役立っているのか、②を選択した方はどのような関与が役に立ち、どのような点が課題か、③を選択した方はどのような点が課題か、具体的にご記入ください。

--

(6) 配分される予算の規模や研究実施期間について、各プロジェクトの目指す成果を創出するのに十分といえますか？費用対効果を考えた上で、1つに○をご記入ください。

選択肢	1つに○↓
①予算、実施期間とも十分である	
②予算は十分だが、実施期間が短い	
③予算は十分とはいえないが、実施期間は十分である	
④予算、実施期間ともに十分とはいえない	

↓

②③④のいずれかを選択した方はどのような点が課題か、具体的にご記入ください。

--

5. その他

プロジェクトの課題を克服する上での支援など、RISTEX や領域に対するご意見、ご要望があれば、自由にご記入ください。

--

ご協力ありがとうございました。質問は以上です。

「持続可能な多世代共創社会のデザイン」研究開発領域
領域運営の改善のための「領域の中間評価」に向けたアンケート

※以下の設問について、回答者個人のお考えをご記入ください。

※自由記入欄について、スペースが不足する場合には拡大してご記入ください。

1. プロジェクト及び記入者自身について

本設問は、問い合わせが必要になった時のためにご記入をお願いするものです。ご本人と領域マネジメントグループ及び調査委託先(未来工学研究所)以外に閲覧することはありません。

プロジェクト名 (略称可)	
記入者(所属)	

2. プロジェクトへの関与のきっかけ

プロジェクトに関わるようになったきっかけについて、具体的にご記入ください。記入欄が不足する場合は、拡大しても構いません(以下、同様)。

--

3. プロジェクトでの立場について

プロジェクトでのあなたの立場について、近いほうに1つ○をご記入ください。なお、どちらに該当するか判断がつかない場合には、研究代表者にご相談ください。

選択肢	1つに○↓
①研究成果の実装の担い手(成果を普及・展開する人や組織)の候補	
②研究成果の受益者やエンドユーザー	

次のページから、上記で選択した立場別にご回答をお願いいたします。

「①研究成果の実装の担い手の候補」を選択された方→2ページから5ページまで

「②研究成果の受益者やエンドユーザー」を選択された方→6ページから8ページまで

【「①研究成果の実装の担い手の候補」を選択された方向け】

4. プロジェクトの状況について

4.1. 研究成果の実装の担い手(成果を普及・展開する人や組織)について

研究成果の実装の担い手として、あなたもしくはあなたの所属する組織は、成果を有効に活用できる体制を構築できそうですか？1つに○をご記入ください。

選択肢	1つに○↓
①十分構築できそうである	
②十分とは言えないが、ある程度期待できる	
③このままでは構築するのが難しい	
④実装の担い手として、具体的な体制のイメージがまだない	

↓

②③④のいずれかを選択した方は、課題や理由等について、具体的にご記入ください。

4.2. プロジェクトメンバー(研究実施者及び協力者)の関与について

(1) プロジェクトを提案、応募するにあたり、あなたもしくはあなたの所属する組織はどの程度関与しましたか？1つに○をご記入ください。

選択肢	1つに○↓
①アイデアを出す段階から十分に関与した	
②他のメンバーを中心に構想したが、内容や期待される役割・貢献について十分納得した上で参加した	
③振り返って考えると、期待される役割や貢献について十分な理解のないまま参加した	
④プロジェクト採択後から関与しており、提案段階には関わっていない	

(2) プロジェクトの目標達成に向けて、現在、あなたもしくはあなたの所属する組織はどの程度関与していますか？1つに○をご記入ください。

選択肢	1つに○↓
①積極的に関与している	
②最低限の関与はするようにしている	
③関与が十分とはいえない	

↓

①～③を回答された方全員について、関与する上での課題や悩みがあれば、具体的にご記入ください。

【「①研究成果の実装の担い手の候補」を選択された方向け】

(3) プロジェクトメンバーとのコミュニケーションはどの程度とれていますか？1つに○をご記入ください。

選択肢	1つに○↓
①十分なコミュニケーションがとれている	
②それなりにコミュニケーションがとれている	
③どちらかというコミュニケーションが不足している	
④コミュニケーションが不足している	

↓

①～④を回答された方全員について、コミュニケーションに関する課題や悩みがあれば、具体的にご記入ください。

4.3. 成果の受益者やエンドユーザーについて

(1) 成果の普及・展開に向けて、働きかけや情報発信を行うべき成果の受益者やエンドユーザー（政府・自治体、各種団体等の利害関係者、市民等）として、どのような人々を想定していますか？具体的にご記入ください。

(2) 記に記載した成果の受益者やエンドユーザーに対し、あなたやあなたの所属する組織は何かしらの働きかけや情報発信を行っていますか？1つに○をご記入ください。

選択肢	1つに○↓
①十分働きかけを行っている	
②十分とは言えないが、何かしらの働きかけを行っている	
③今後働きかけを行う予定はある	
④現在働きかけを行っておらず、明確な予定もない	

↓

①②③のいずれかを選択した方はその内容を、④を選択した方はその理由や状況等を、具体的にご記入ください。

4.4. プロジェクトの進捗状況及び課題について

(1) 成果の普及・展開に向けて、あなたもしくはあなたの所属する組織は研究成果に対しどの程度の期待感を

【「①研究成果の実装の担い手の候補」を選択された方向け】

持っていますか？ 1つに○をご記入ください。

選択肢	1つに○↓
①十分な期待感を持っている	
②課題はあるが、それなりに期待感を持っている	
③あまり期待感を持っていない	
④分からない	

↓

②③④のいずれかを選択した方については、どのような点が課題か、具体的にご記入ください。

(2) プロジェクトを進める上で、認識されている課題があればご記入ください。(上位3つまで)

5. プロジェクトに関わることで生まれた変化について

領域では「ステークホルダー協働」や「社会実装(成果の普及・展開)」を重視した研究開発を推進しています。領域でのプロジェクトに関わるようになったことで、ご自身や周りにどのような変化がうまれましたか？該当するものに○をご記入ください(複数可)。

選択肢	該当するものに○
①これまでとは異なる問題解決の可能性を感じるようになった(自身の実践に対する影響)	
②研究とはどのようなものか、理解できるようになった	
③研究や研究者に対する見方、評価がよい意味で変わった	
④研究開発に関わることに對し、所属する組織から関心や理解もしくは支持を得られるようになった	
⑤他の自治体や組織等から、関心をもたれるようになった	
⑥研究者とのネットワークが広がった	
⑦研究者以外の様々な人たちとのネットワークが広がった	
⑧特に目立った変化はない	
⑨その他	

↓

⑨を選択した方について、具体的にどのような変化がうまれたのか、具体的にご記入ください。

【「①研究成果の実装の担い手の候補」を選択された方向け】

6. その他

RISTEX や領域に対するご意見、ご要望があれば、自由にご記入ください。

「①研究成果の実装の担い手の候補」とご回答いただいた方への質問は以上です。
ご協力ありがとうございました。

次ページから、「②研究成果の受益者やエンドユーザー」を選択された方向けの質問になります。

↓↓↓

【「②研究成果の受益者やエンドユーザー」を選択された方向け】

7. プロジェクトの状況について

7.1. プロジェクトメンバー(研究実施者及び協力者)の関与について

(1) プロジェクトを提案、応募するにあたり、あなたもしくはあなたの所属する組織はどの程度関与しましたか？1つに○をご記入ください。

選択肢	1つに○↓
①アイデアを出す段階から十分に関与した	
②他のメンバーを中心に構想したが、内容や期待される役割・貢献について十分納得した上で参加した	
③振り返って考えると、期待される役割や貢献について十分な理解のないまま参加した	
④プロジェクト採択後から関与しており、提案段階には関わっていない	

(2) プロジェクトの目標達成に向けて、現在、あなたもしくはあなたの所属する組織はどの程度関与していますか？1つに○をご記入ください。

選択肢	1つに○↓
①積極的に関与している	
②最低限の関与はするようにしている	
③関与が十分とはいえない	

↓

①～③を回答された方全員について、関与する上での課題や悩みがあれば、具体的にご記入ください。

(3) プロジェクトメンバーとのコミュニケーションはどの程度とれていますか？1つに○をご記入ください。

選択肢	1つに○↓
①十分なコミュニケーションがとれている	
②それなりにコミュニケーションがとれている	
③どちらかというとコミュニケーションが不足している	
④コミュニケーションが不足している	

↓

①～④を回答された方全員について、コミュニケーションに関する課題や悩みがあれば、具体的にご記入ください。

【「②研究成果の受益者やエンドユーザー」を選択された方向け】

7.2. プロジェクトの進捗状況及び課題について

(1) 成果の普及・展開に向けて、あなたもしくはあなたの所属する組織は研究成果に対しどの程度の期待感を持っていますか？ 1つに○をご記入ください。

選択肢	1つに○↓
①十分な期待感を持っている	
②課題はあるが、それなりに期待感を持っている	
③あまり期待感を持っていない	
④分からない	

↓

②③④のいずれかを選択した方については、どのような点が課題か、具体的にご記入ください。

--

(2) 成果の普及・展開に向けて、あなたもしくはあなたの所属する組織に対し、領域やプロジェクト側からどのような働きかけを行う必要があると思いますか？その内容や方法等を具体的にご記入ください。

--

(3) プロジェクトを進める上で、認識されている課題があればご記入ください。(上位3つまで)

次のページに続きます。

【「②研究成果の受益者やエンドユーザー」を選択された方向け】

8. プロジェクトに関わることで生まれた変化について

領域では「ステークホルダー協働」や「社会実装(成果の普及・展開)」を重視した研究開発を推進しています。領域でのプロジェクトに関わるようになったことで、ご自身や周りにどのような変化がうまれましたか？該当するものに○をご記入ください(複数可)。

選択肢	該当するものに○
①これまでとは異なる問題解決の可能性を感じるようになった(自身の実践に対する影響)	
②研究とはどのようなものか、理解できるようになった	
③研究や研究者に対する見方、評価がよい意味で変わった	
④研究開発に関わることに對し、所属する組織から関心や理解もしくは支持を得られるようになった	
⑤他の自治体や組織等から、関心をもたれるようになった	
⑥研究者とのネットワークが広がった	
⑦研究者以外の様々な人たちとのネットワークが広がった	
⑧特に目立った変化はない	
⑨その他	

↓

⑨を選択した方について、具体的にどのような変化がうまれたのか、具体的にご記入ください。

9. その他

RISTEX や領域に対するご意見、ご要望があれば、自由にご記入ください。

「②研究成果の受益者やエンドユーザー」とご回答いただいた方への質問は以上です。
ご協力ありがとうございました。

**「持続可能な多世代共創社会のデザイン」研究開発領域
領域運営の改善のための「領域の中間評価」に向けたアンケート**

※以下の設問について、回答者個人のお考えをご記入ください。

※自由記入欄について、スペースが不足する場合には拡大してご記入ください。

1. プロジェクト及び記入者自身について

本設問は、問い合わせが必要になった時のためにご記入をお願いするものです。ご本人と領域マネジメントグループ及び調査委託先(未来工学研究所)以外に閲覧することはありません。

プロジェクト名 (略称可)	
記入者(所属)	

2. プロジェクトの開始もしくは関与のきっかけ

代表者の方はプロジェクトを始めたきっかけについて、グループリーダーの方はプロジェクトに関わるようになったきっかけについて、具体的にご記入ください。

--

3. プロジェクトの状況について(プロジェクトの自己診断)

3.1. 研究者の構成について

プロジェクトの目標達成に向けて、必要とされる学問的な専門性は現在のメンバー構成で確保できていますか？1つに○をご記入ください。

選択肢	1つに○↓
①十分確保できている	
②ある程度確保できている	
③不十分である	

↓

②もしくは③を選択した方について、どのような点が課題か、具体的にご記入ください。

--

3.2. 研究成果の実装の担い手(成果を普及・展開する人や組織)について

プロジェクトとして想定している研究成果の実装の担い手は、成果を有効に活用できる体制を構築できそうですか？1 つに○をご記入ください。

選択肢	1つに○↓
①十分構築できそうである	
②十分とは言えないが、ある程度期待できる	
③このままでは構築するのが難しい	
④実装の担い手について、プロジェクトとしての具体的なイメージがまだない	

↓

②③④のいずれかを選択した方は、課題や理由等について、具体的にご記入ください。

3.3. プロジェクトメンバー(プロジェクト実施者及び協力者)間の協働について

(1) プロジェクトを提案、応募するにあたり、プロジェクトメンバーはどの程度関与しましたか？1 つに○をご記入ください。

選択肢	1つに○↓
①NPO や自治体等の実践のパートナーを含め、アイデアを出す段階から十分に関与した	
②一部のメンバーを中心に構想したが、全員に十分納得してもらった上で提案した	
③期待される役割や貢献について、十分な理解のないまま参加したメンバーもいた	

↓

③を選択した方について、理想的にはどのようなメンバーがどのような形で関与すべきであったのか等、具体的にご記入ください。

(2) プロジェクト内の他の実施者や協力者の持つ専門知、実践知を統合するために、どのような形でコミュニケーションをとっていく予定ですか？具体的にご記入ください。(例：日常的にメーリングリストで情報共有を行うほか、半年に一度全員参加のワークショップを行う予定、等)

3.4. 成果の受益者やエンドユーザーについて

- (1) 成果の社会実装に向けて、働きかけや情報発信を行うべき成果の受益者やエンドユーザー(政府・自治体、各種団体の利害関係者、市民等)として、どのような人々を想定していますか？具体的にご記入ください。

--

- (2) 上記に記載した成果の受益者やエンドユーザーに対し、どのような働きかけや情報発信を行う予定ですか？具体的にご記入ください。

--

4. 領域の制度や関与の効果について

- (1) 公募要領の記述や公募説明会、提案募集ワークショップなどにおける説明は、領域が各プロジェクトに求めているものを理解するのに十分役に立ちましたか？1つに○をご記入ください。

選択肢	1つに○↓
①十分役に立った	
②十分とは言えないが、実際の内容と大きな齟齬はなかった	
③実際に活動してみると、想像していたものと異なっていた	
④公募要領をちゃんと読み込んでおらず、説明会や提案募集ワークショップなどにも参加していない	

↓

- ①を選択した方は具体的に何が役に立ったのか、②もしくは③を選択した方はどのような点が課題か、具体的にご記入ください。

--

- (2) プロジェクトの選考プロセスは、協働や社会実装を重視したプロジェクトの計画を具体化する上で有効に機能しましたか？1つに○をご記入ください。なお、プロジェクトの選考プロセスとは、書類・面接選考や二段階選考及びそこでの領域からのコメント、総括面談、ロジックモデルの作成、領域としてのリサーチクエスションの提示、プロジェクト企画調査や一般枠／俯瞰・横断枠の設定を指します。

選択肢	1つに○↓
①十分機能していた	
②改善すべき点はあるが、それなりに機能していた	
③あまり機能していない	

↓

①を選択した方はどのような点がよかったのか、②を選択した方はどのような点が機能し、どのような点が課題か、③を選択した方はどのような点が課題か、具体的にご記入ください。

--

(3) 配分される予算の規模や研究実施期間について、各プロジェクトの目指す成果を創出するのに十分といえますか？費用対効果を考えた上で、1つに○をご記入ください。

選択肢	1つに○↓
① 予算、実施期間とも十分である	
② 予算は十分だが、実施期間が短い	
③ 予算は十分とはいえないが、実施期間は十分である	
④ 予算、実施期間ともに十分とはいえない	
⑤ まだ判断できない	

↓

②③④のいずれかを選択した方はどのような点が不十分で、それによりどのような問題が生じるのか、具体的にご記入ください。

--

5. その他

RISTEX や領域に対するご意見、ご要望があれば、自由にご記入ください。

--

ご協力ありがとうございました。質問は以上です。

「持続可能な多世代共創社会のデザイン」研究開発領域
領域の中間評価に向けたアンケート

※以下の設問について、回答者個人のお考えをご記入ください。

※自由記入欄について、スペースが不足する場合には拡大してご記入ください。

1. プロジェクト及び記入者自身について

本設問は、問い合わせが必要になった時のためにご記入をお願いするものです。ご本人と領域マネジメントグループ及び調査委託先(未来工学研究所)以外に閲覧することはありません。

プロジェクト名 (略称可)	
記入者(所属)	

2. プロジェクトへの関与のきっかけ

プロジェクトに関わるようになったきっかけについて、具体的にご記入ください。記入欄が不足する場合は、拡大しても構いません(以下、同様)。

--

3. プロジェクトでの立場について

プロジェクトでのあなたの立場について、近いほうに 1 つ〇をご記入ください。なお、どちらに該当するか判断がつかない場合には、研究代表者にご相談ください。

選択肢	1つに〇↓
①研究成果の実装の担い手(成果を普及・展開する人や組織)の候補	
②研究成果の受益者やエンドユーザー	

次のページから、上記で選択した立場別にご回答をお願いいたします。

「①研究成果の実装の担い手の候補」を選択された方 → 2ページから3ページまで

「②研究成果の受益者やエンドユーザー」を選択された方 → 4ページから5ページまで

【「①研究成果の実装の担い手の候補」を選択された方向け】

4. プロジェクトの状況について

4.1. 研究成果の実装の担い手(成果を普及・展開する人や組織)について

あなたもしくはあなたの所属する組織は、成果を有効に活用できる体制を構築できそうですか？1 つに○をご記入ください。

選択肢	1つに○↓
①十分構築できそうである	
②十分とは言えないが、ある程度期待できる	
③このままでは構築するのが難しい	
④実装の担い手として、どのような展開になるのか具体的なイメージがまだない	

↓

②③④のいずれかを選択した方は、課題や理由等について、具体的にご記入ください。

4.2. プロジェクトメンバー(研究実施者及び協力者)の関与について

プロジェクトを提案、応募するにあたり、あなたもしくはあなたの所属する組織は十分に関与しましたか？1 つに○をご記入ください。

選択肢	1つに○↓
①アイデアを出す段階から十分に関与した	
②他のメンバーを中心に構想したが、内容や期待される役割・貢献について十分納得した上で参加した	
③振り返って考えると、期待される役割や貢献について十分な理解のないまま参加した	
④プロジェクト採択後から関与しており、提案段階には関わっていない	

4.3. 成果の受益者やエンドユーザーについて

(1) 成果の普及・展開に向けて、働きかけや情報発信を行うべき成果の受益者やエンドユーザー(政府・自治体、各種団体の利害関係者、市民等)として、どのような人々を想定していますか？具体的にご記入ください。

(2) 上記に記載した成果の受益者やエンドユーザーに対し、あなたもしくはあなたの所属する組織は何かしらの働きかけや情報発信を行う予定ですか？ もしあれば、具体的にご記入ください。

4.4. プロジェクトに対する期待や課題について

(1) 成果の普及・展開に向けて、あなたもしくはあなたの所属する組織は研究成果に対しどの程度の期待感を持っていますか？ 1つに○をご記入ください。

選択肢	1つに○↓
①十分な期待感を持っている	
②課題はあるが、それなりに期待感を持っている	
③あまり期待感を持っていない	
④分からない	

↓

②③④のいずれかを選択した方については、どのような点が課題か、具体的にご記入ください。

--

(2) プロジェクトを進める上で、認識されている課題があればご記入ください。(上位3つまで)

5. その他

RISTEX や領域に対するご意見、ご要望があれば、自由にご記入ください。

--

「①研究成果の実装の担い手の候補」とご回答いただいた方への質問は以上です。
ご協力ありがとうございました。

次ページから、「②研究成果の受益者やエンドユーザー」を選択された方向けの質問になります。

↓↓↓

【「②研究成果の受益者やエンドユーザー」を選択された方向け】

6. プロジェクトの状況について

6.1. プロジェクトメンバー(研究実施者及び協力者)の関与について

プロジェクトを提案、応募するにあたり、あなたもしくはあなたの所属する組織は十分に関与しましたか？1 つに○をご記入ください。

選択肢	1つに○↓
①アイデアを出す段階から十分に関与した	
②他のメンバーを中心に構想したが、内容や期待される役割・貢献について十分納得した上で参加した	
③振り返って考えると、期待される役割や貢献について十分な理解のないまま参加した	
④プロジェクト採択後から関与しており、提案段階には関わっていない	

6.2. 成果の受益者やエンドユーザーについて

成果の普及・展開に向けて、あなたもしくはあなたの所属する組織に対し、領域やプロジェクト側からどのような働きかけを行う必要があると思いますか？その内容や方法等を具体的にご記入ください。

6.3. プロジェクトに対する期待や課題について

(1) 成果の普及・展開に向けて、あなたもしくはあなたの所属する組織は研究成果に対しどの程度の期待感を持っていますか？ 1 つに○をご記入ください。

選択肢	1つに○↓
①十分な期待感を持っている	
②課題はあるが、それなりに期待感を持っている	
③あまり期待感を持っていない	
④分からない	

↓

②③④のいずれかを選択した方については、どのような点が課題か、具体的にご記入ください。

【「②研究成果の受益者やエンドユーザー」を選択された方向け】

(2) プロジェクトを進める上で、認識されている課題があればご記入ください。(上位3つまで)

7. その他

RISTEX や領域に対するご意見、ご要望があれば、自由にご記入ください。

--

「②研究成果の受益者やエンドユーザー」とご回答いただいた方への質問は以上です。
ご協力ありがとうございました。

「持続可能な多世代共創社会のデザイン」研究開発領域
領域運営の改善のための「領域の中間評価」に向けたアンケート

※以下の設問について、回答者個人のお考えをご記入ください。

※自由記入欄について、スペースが不足する場合には拡大してご記入ください。

1. 領域をとりまく問題状況や社会情勢について

領域がはじまった3年前(平成25年春頃)と比較し、領域をとりまく問題状況や社会情勢は変化していると思われますか？該当するもの1つに○をご記入ください。

選択肢	1つに○↓
①大きく変化している	
②少し変化している	
③ほとんど変化していない	

↓

①、②を選択した方はどのような変化があったのか、具体的にご記入ください。

--

2. 領域としての成果及び成果創出に向けた取組について

2.1. 領域の問題意識や目指す社会の姿、コンセプトの深化について

(1) 領域での活動や研究が進んできた現在において、領域の設定した問題意識や目指す社会の姿、コンセプトは深化してきたと思いますか？該当するもの1つに○をご記入ください。

※ ここでいう「問題意識やコンセプトの深化」とは、「多世共創」による「地域デザイン」が「持続可能な社会の実現」に有効であるという仮説や、その背景にある問題意識の検証・検討状況のことをさします。

選択肢	1つに○↓
①期待以上に深化してきている	
②それなりに深化してきている	
③十分に深化しているとはいえない	

(2) 領域としての問題意識や目指す社会の姿、コンセプトの深化に向けて、領域としての取組は効果的と思われますか？1つに○をご記入ください。

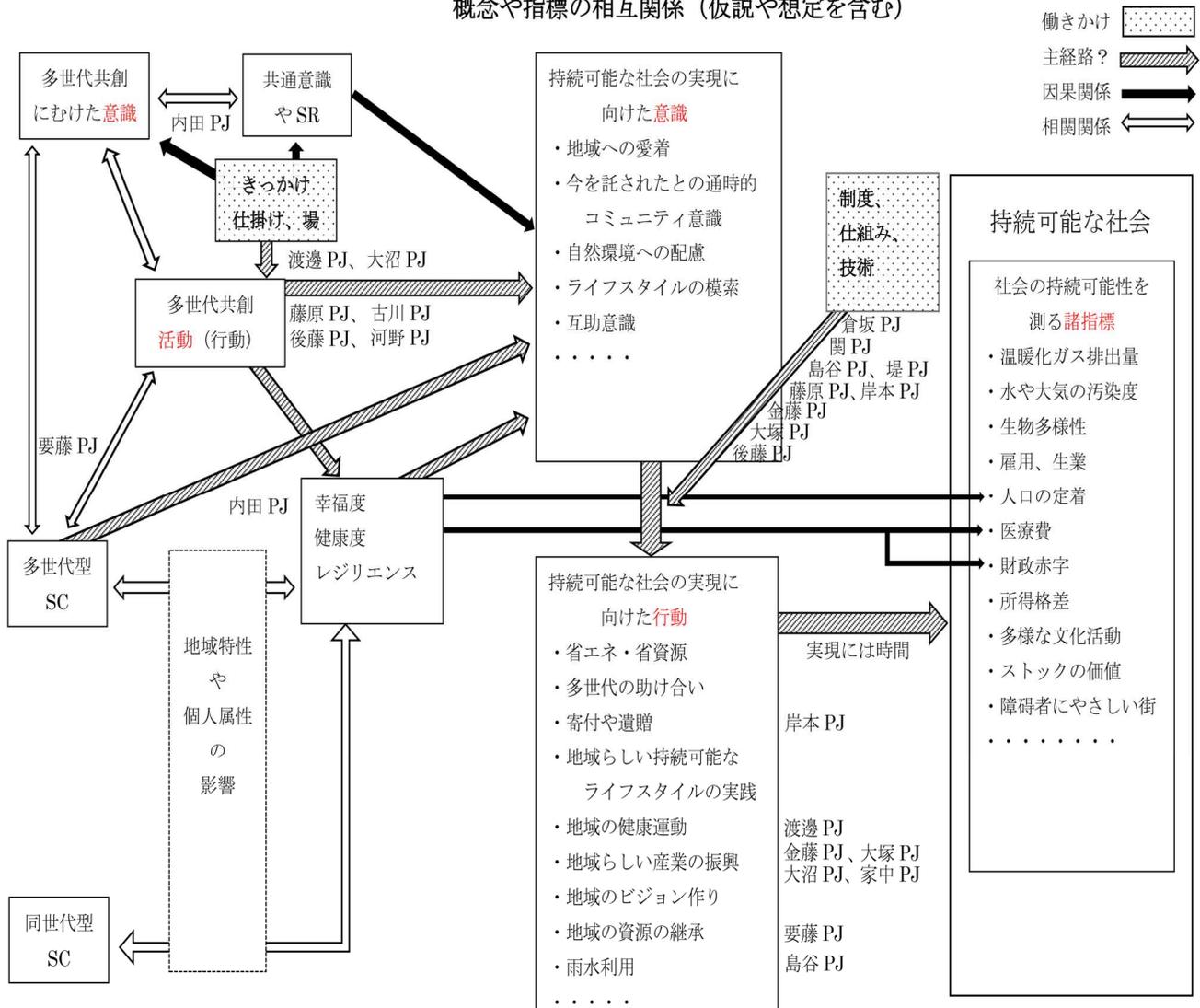
※ 取組の例: マネジメントグループ内での勉強会(平成26年度3回)、バックキャストのミニワークショップ(平成27年度)、リサーチクエストの設定、キーワード集の作成、多世代共創事例の収集、公開のシンポジウム及びワークショップの開催、16プロジェクトの推進等

選択肢	1つに○↓
①十分効果的である	
②課題はあるが、効果的である	
③あまり効果的ではない	

(3) 領域としての問題意識や目指す社会の姿、コンセプトの深化に向けて、現在採択されているプロジェクトの構成(ポートフォリオ)では満たすことのできない、もしくは欠けている視点はありますか？次図(合宿での議論を基に総括が作成)を参考に、具体的にご記入ください。図自体に対するご意見でも構いません。

2016年11月21日

概念や指標の相互関係 (仮説や想定を含む)



- (4) 領域としての問題意識や目指す社会の姿、コンセプトの深化に向けて、特に効果的と思う取組や、成果として対外的にアピールすべきものがあれば、具体的にご記入ください。また、改善すべき課題や、領域として今後取り組むべきことについてのアイデアがあればご記入ください。

2.2. 領域内外のステークホルダーや領域の成果の担い手・受け手とのネットワークについて

- (1) 「多世代共創」や「持続可能性」、「地域デザイン」といった領域のコンセプトや成果を社会に普及・展開するために、領域としてアプローチすべき対象にはどのような組織や個人がいますか？特に、領域として対話や連携などを模索すべき方々がいれば、その理由(領域と比較してユニークと思われる点など)とともに具体的にご記入ください。

※ ここでいう「対象」とは、領域と類似の問題意識やコンセプトを持つ活動や研究を行っている組織・個人や、領域のコンセプトや成果の普及・展開の潜在的な担い手、受け手(利用者、受益者)を含みます。

- (2) 領域での活動や研究が進んできた現在、領域の考えるコンセプトや成果の普及・展開の潜在的な担い手、受け手(利用者、受益者)等とのネットワークはどの程度形成されていますか？該当するもの 1 つに○をご記入ください。

選択肢	1つに○↓
①期待以上に形成されてきている	
②それなりに形成されてきている	
③十分に形成されているとはいえない	

↓

- ①、②を選択された方について、成果として対外的にアピールすべきものがあれば、具体的にご記入ください。

- (3) 領域の考えるコンセプト・成果の普及・展開の潜在的な担い手、成果の受け手(利用者、受益者)等とのネットワークの形成、そして、その拡大や強化に向けて、領域としての取組は効果的と思われますか？1 つに○をご記入ください。

※ 取組の例：公開のシンポジウムやワークショップ、16 プロジェクトの推進、ウェブサイトでの発信、アドバイザー一人による関係者への働きかけ、等

選択肢	1つに○↓
①十分効果的である	
②課題はあるが、効果的である	
③あまり効果的ではない	

↓

特に効果的と思う取組や改善すべき課題を具体的にご記入ください。また、領域として今後取り組むべきことについてのアイデア(現在、個人として取り組んでいるが、領域として取り組むべきもの等を含む)があればご記入ください。

2.3. ご自身や周りの変化について

領域では「ステークホルダー協働」や「社会実装」を重視した研究開発を推進しています。アドバイザーとして領域の活動に関わるようになったことで、ご自身や周りにどのような変化がうまれましたか？該当するものに○をご記入ください(複数可)。

選択肢	該当するものに○
①これまでとは異なる研究アプローチ等の可能性を感じるようになった	
②これまでとは異なる問題解決の可能性を感じるようになった	
③所属する研究コミュニティ(学会等)の研究者から関心をもたれるようになった	
④関連する問題の実践者(政府、自治体、NPO等)から関心をもたれるようになった	
⑤学生や生徒から関心を持たれるようになった	
⑥所属する組織から関心や理解もしくは支持を得られるようになった	
⑦政府・自治体の政策や政策プロセスについて、よく理解できるようになった	
⑧研究とはどのようなものか、理解できるようになった	
⑨問題解決の現場の実態について、よく理解できるようになった	
⑩研究や研究者に対する見方、評価がよい意味で変わった	
⑪実践者に対する見方、評価がよい意味で変わった	
⑫問題解決の現場の実態について、よく理解できるようになった	
⑬他分野の研究者とのネットワークが広がった	
⑭研究者以外の様々な人たちとのネットワークが広がった	
⑮特に目立った変化はない	
⑯その他	

↓

「⑯その他」を選択した方について、具体的にどのような変化がうまれたのか、具体的にご記入ください。

--

3. 領域の制度や運営・活動状況(プロセス)について

3.1. プロジェクトの募集選考プロセスについて

(1) プロジェクトの募集方法は、領域の求めるプロジェクト提案をしてくれそうな潜在的な申請者に対し、十分にアプローチできたと思われますか？1つに○をご記入ください。

※ 取組の例: RISTEX のウェブサイトや JST のメーリングリストでの情報発信、募集説明会、シンポジウム、提案募集ワークショップ、アドバイザーのネットワークを通じたメーリングリスト等への展開、等

選択肢	1つに○↓
①十分アプローチできている	
②課題はあるが、アプローチできている	
③あまりアプローチできていない	

↓

特に効果的と思う取組や改善すべき課題を具体的にご記入ください。具体的な改善提案があればあわせてご記入ください。

--

(2) 選考プロセスは、社会問題の解決にむけて協働や社会実装を重視した研究開発のプロジェクトを採択するのに有効に機能しましたか？1つに○をご記入ください。

※ プロジェクトの選考プロセスとは、書類・面接による選考や二段階選考(平成 27 年度より)及びそこでの領域からのコメント、総括面談、ロジックモデルの作成、領域としてのリサーチクエスションの提示(平成 27 年度より)、プロジェクト企画調査の設定を指します。

選択肢	1つに○↓
①十分機能していた	
②改善すべき点はあるが、それなりに機能していた	
③あまり機能していない	

↓

特に効果的と思う取組や改善すべき課題を具体的にご記入ください。具体的な改善提案があればあわせてご記入ください。

--

(3) 募集選考プロセスは、提案を育む上で有効に機能しましたか？1つに○をご記入ください。

※ 提案を育むとは、領域の問題意識やコンセプトとの親和性の向上や方向性の調整、社会問題の解決に向けて協働や社会実装を重視した研究開発計画の具体化や改善等をさします。

選択肢	1つに○↓
①十分機能していた	
②改善すべき点はあるが、それなりに機能していた	
③あまり機能していない	

↓

特に効果的と思う取組や改善すべき課題を具体的にご記入ください。具体的な改善提案があればあわせてご記入ください。

3.2. プロジェクトの選考にあたっての評価項目について

領域としての成果創出や、「ステークホルダー協働」や「社会実装」を重視したよりよい研究開発のプロジェクトを採択するために、選考にあたってはどのような点を重視すべきとお考えですか？一般枠、俯瞰・横断枠のそれぞれについてご記入ください。参考までに、平成28年度の主な評価項目を示します。

(1) 一般枠

(参考)平成28年度の主な評価項目

- ①領域のコンセプトを踏まえている：多世代共創
 - ②領域のコンセプトを踏まえている：持続可能な地域のデザイン
 - ③研究開発として何を明らかにしようとしているかが明確である
 - ④プロジェクト終了後も何らかの形で活動や成果が社会に根着くことが期待できる：社会実装への展開
 - ⑤提案を育む価値・可能性がある

(2) 俯瞰・横断枠

(参考)平成28年後の主な評価項目

- ①領域の成果創出・目標達成に貢献するテーマ設定になっている、あるいは、研究開発プロジェクトの成果の統合が期待できる
 - ②領域のコンセプトを踏まえている：多世代共創

- ③領域のコンセプトを踏まえている： 持続可能な地域のデザイン
 ④研究開発として何を明らかにしようとしているかが明確である
 ⑤領域マネジメントグループとの対話・協働が期待できる

3.3. プロジェクトの期間、予算について

各プロジェクトに配分される予算の規模や研究実施期間について、各プロジェクトの目指す成果を創出するのに妥当であるといえますか？(1)予算の規模と(2)研究開発実施期間のそれぞれについて、費用対効果を考えた上で、1つに○をご記入ください。

[一般枠] 一課題 数百万円～30 百万円/年(12ヶ月)、

期間:原則として3年間(1,2年目採択プロジェクトについては延長の可能性有)

[俯瞰・横断枠] 一課題 数百万円～10 百万円、 期間:原則として1年間(延長の可能性有)

(1)各プロジェクトに配分される予算の規模について

選択肢	1つに○↓
①多すぎる	
②ちょうどよい	
③少なすぎる	

↓

予算の過不足により、生じているもしくは生じうる問題があれば、具体的にご記入ください。

(2)各プロジェクトの研究開発期間について

選択肢	1つに○↓
①長すぎる	
②ちょうどよい	
③短すぎる	

↓

研究開発期間の過不足により、生じているもしくは生じうる問題があれば、具体的にご記入ください。

3.4. プロジェクトへの関与について

(1) 領域では、採択後もプロジェクトに対しての関与(例:日常的なコミュニケーション、サイトビジット、進捗報告会、領域合宿、シンポジウム、研究者や実践者の紹介、領域ウェブサイトでの情報発信、等)を行っています。

これらを通じて、担当プロジェクトを中心に十分にコミュニケーションがとれていますか？

選択肢	1つに○↓
①十分コミュニケーションがとれている	
②改善すべき点はあるが、それなりにコミュニケーションはとれている	
③コミュニケーションが十分にとれているとはいえない	

↓

特に効果的と思う取組や改善すべき課題を具体的にご記入ください。具体的な改善提案があればあわせてご記入ください。

(2) よりよい領域成果の創出に向けて、領域マネジメントグループ内でのコミュニケーションは十分にとれていますか？1つに○をご記入ください。

選択肢	1つに○↓
①十分コミュニケーションがとれている	
②改善すべき点はあるが、それなりにコミュニケーションはとれている	
③コミュニケーションが十分にとれているとはいえない	

↓

特に効果的と思う取組や改善すべき課題を具体的にご記入ください。具体的な改善提案があればあわせてご記入ください。

3.5. アドバイザーに求められる役割について

(1) アドバイザーに求められる役割として、ご自身はどのようなことを担われ、重視していますか？該当するものについて、凡例を参考にしながら優先順位をご記入ください(いくつでも可)。

選択肢	優先順位を記入	(凡例)
①募集に向けた検討課題の整理と企画に対する助言		
②募集要項の記述内容等に対する助言		
③プロジェクトの計画書や報告書の精査		
④サイトビジット等を通じたプロジェクトの進捗および課題の把握		2
⑤プロジェクトの改善や成果の実装に向けた提案や助言		1
⑥領域としての成果創出への寄与		
⑦領域内外のステークホルダーとのネットワーク形成への寄与		3

⑧その他		4
------	--	---

↓

⑧を選択された方について、具体的にご記入ください。

(2)アドバイザー制度の改善点があれば自由にご記入ください。

4. その他

RISTEX や領域の運営改善に向けて、ご意見、ご要望があれば、自由にご記入ください。領域総括や領域担当へのご意見、ご要望でも構いません。

ご協力ありがとうございました。質問は以上です。